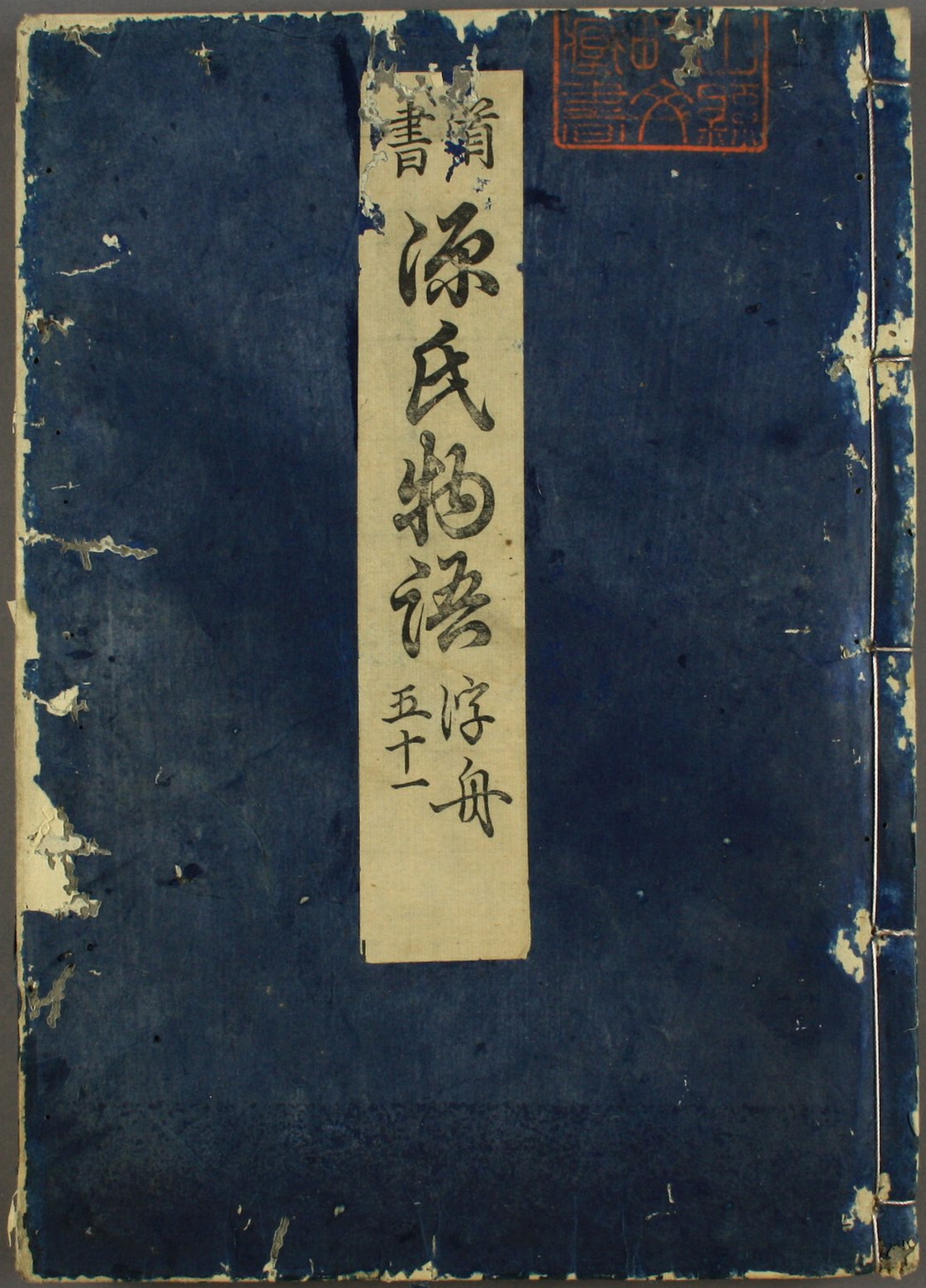
源氏物語
五十一
字舟
書

富山県立図書館蔵書

石黒文庫

五千一

○河 才世四巻名 揃のごとくの色もうくゝしと世くさ舟うゆく名ともゝ
花 宇治七 巻の名八哥とゝもいふ也董大将のサ三歳乃春れ事也
○弄 東屋巻八董廿五歳九月まで也董廿六歳冬巻の初つゝさ正月ゟ三月まで也

○官ゐとうの花 匂宮の二条院の對の浮舟君をうち出ゐたてまつる也
○ちゝくゝさ 細 浮舟のこと也 孟 匂宮の心也

○女君ゝゝ 細 誰人ともしれぬ女ハらと宮のうつゝくゝ与ゐ也蜻蛉の心ともあらんとなり
○あてくゝゝ 細 中君の心也

ゐるとうのなかのうなりークをぶ
ほーまるて世ゐーごとく
さなどゝゐるまでぜゐりを
人ぐのまやふやうもゐるもーうゐごなる
ほゝろかぐらゐーえやれー
ゝく神ゝれぐるまよ
をんなゝみをもうゝゐさ
ゝゆゐおぐらゝるすぐの
りのゝゝゝまひゝゐもゐ
ゝぐおゝろーゝまぐ恨
きゝゝなゝゐりくゐゝゐ二

○やんごとなさ　弄　其の浮舟君ともへとさゝ
心といふ

○ものゝひ　河　こゝろにくる白うへ其島花へ
のそのひさうるくさ世ゝ

○さそこそ　細　白宮の恋とゝ

○これ五よりうへ　或抄　白宮のかゝるうへハうるさ
なをろゝ

○さハり月日と　巴抄　白宮の浮舟へ心のもろ也

○いつくさなること　弄　いつをこと白宮ハうるさ
るをといと物くゝ

○毎日〳〵さ　細　中君の我身の毎日〳〵さるうへハ
あるをゝ

○ようそのくるハ　或抄　浮舟ハ兄君うれハ也

○うろをこゝろ　細　嫉妬りへと物とハゝりハうる
ーゝさろゝ

○いと物うる　巴抄　白宮のあくれ給ハいと物うる

○ゝさなる　弄　中君の心優也ゝゝとハえりひ出
給ろゝ

かろよさゞり月日をてゝおゞ
ーもりるあろほゝてあるう
ずうゞろーさゝこうそおひ
てんおゝりけんこゝろのもの
くゝそれあるも毎日ぐゝさ人
のはこゝろあうう海なねゞそ
のんうハいさゝあゝおゞう
ゞおゞ白ゞさゝてもくゝて
ゞをゝろそゝおそうこゝ
ゞとりへゝおゝつゞお
あゞえをゝしゞさ海ゝ

○ものえ　ちう　孟　娭妬の心うていふと白宮
のおひおとゝゝそうろう

○うの人　花　是ハ草の字治ひの事也

○こゝ〳〵す　細　よく也

○やをく　細よく心をとゞめうろう殊勝也

○神のつきなみ　河　こひ〳〵ハそもゝ〳〵ちはや
ぶる神代のことの道ゆく
拜　哥の心よりおり引くてなれよりしもと也
○今つゝしみ　孟　浮舟を来へとひてとゝん

ぎ海よりほそぐきたくえんひの
しく海のやうにそこうてものの
えんじきろうのつものくまり
てでおもうのくへたく
るのごふかぬがをそまち
どをあうとおりうんこゝろぐ
しくよりこゝろをまひやう
ゝろ四きあのかごをうぐさ
はいうおくてやすくかしお
ぐさんちあうねぐ神のおうぐ
うもうおゝ・これど海にて
くそのおんをす・ぐうのあぐ

○そこ〳〵　己被　山里ゝ目うとく行くんひまと
つう出ぬまゝゝ字治へ無音ゝゝ

○おそ〳〵　人の　或被　来そそひうるるまゝ

○うの心をゝ　孟　浮舟の心を芸れうう又我をゝ人の
ととうをやうゝてとゝん

○そこ〳〵れ心ゝ　孟　董の道心うく〳〵ひて今又人を
ひうるく〳〵いそれをやうゝせんゝ
或被大君のをとのうくうとをれて浮舟ゝ心をうとゝ
いくんうるととうう的也
○又宮の人ゝ　花　是ハ二条の中君ゝる也

さあく〳〵ひをまそてくうう
をずう〳〵ひずもつぐさくぐ
もしたうぐ〳〵のぐやうふゆうんの
うんぐそちぐ〳〵いんのうるまうさ
をくぐうう〳〵てやうくさうく〳〵よ
うのくうをものぐあをうぐ
そあうもんのひぐさうまぐ
くおのうそくそうろうゆはう
よかふんぐうつもあぐ・ぐさぐ
うちもんものさぐく・ぐう
乃うくうふぐぐ・まくうの
ゆくのさくばんをもの・もう

○そこの事と 巴投 字治を引くるあへて中君共なり
ふるんるいうこと

○きいの 細 草子地也

○うちとくさ不 乗 三条宮近き事也

○女ごるるさ 細 董八官位も高くるう的へ家
中もひまるさやうるれと中君への心つひ心しく
うくうさる也旧識とうもれさる殊勝のる也
或抜一説 廿三官又浮舟うと

○又そうろくへと 細 昔のまとうろくへハ又とう心
ふまて とへる心

○世中を 細 中君世とうろうのてハ業共くこと
大切ようひうろうのう

うろうをきうはぐしをかろ
もしくをもとしなくるんも
いてかのーうどぎーづる
もまのてくのどけさすだか
かうろうるべまみすぐさ
うろうやがまくけてしのどて
ぞはうせ多ひろすうたる
まのさまうものなうまひよ
れどかのまうはるをも
んかくうろうもはうまう
かつてかのやうなりんまる
人もあやさまで苦つまど也

かひまうり 細 業のるといり中君の心也自宮
のかうろ色くくてまのりをうさ時ハ昔大君
共我身と業よゆうり好ものをやうるまへ
今ハ忌ひ給也

中をゆりくかぎうくんのを
ま河をうんまふこまて
ハまとふひりをとれかうる
ぐさのなぐりさへかうる房
かまとおくなすかうぐ
称びまうかまふへでもか
ばしもさ風とふものまへ
えの御うろ共かまうなり
をかさとくいかうぐかう
もうすま世うかうのぐみ乃
ぬりをそへまふもかで
うるねかうぐうろみも

○それとさためん　巴扱　中君の芝へ也

○弁月もあまり　弄　芝へ宇治より今まで後見致ひし中君との間ハ多也始ハ宇治のそこそこにて中君よ芝のわたりしより勿論也其後弁月とへだてゝ元来の由緒とねんごろにハいるとも思ハれずつまりこゝろまでへだゝるの心なるべし

○中くらう　弄　此詞中君の気遣心すくなし

○かゝやそこと　巴扱　白宮の絶を芝への中とうたひ給也

○あるす心　巴扱　中君の方よりこゝろくるゝとも芝へハ不変るむこのゆゑと

○外よハくろ　或扱　別の腹よハ男子誕生もあるまじきゆゑ也

○ありしとうハ　孟　中君也

○此月の朔日　弄　始てまろうぶとてよめる細　董廿六歳の正月也

○ちいさきうへハ 或抄 中君の童也

○はく乃文 花 河海云さて文のう也ゝ今案さて文ハ別也つゐ乃文ハさき物うへのやうな文をうしやうそて包也嫁娶の後朝の艶書うへハ皆包文也此つゐてやう旧記よりへ〻より此段ハ文をくしさて文とりうへてあるへくそまいりとゝりよりさて文作乃文二やうよありとゝて作り 細花鳥可然つゐ文ねへハ浴舟の文也さて文ハ右近う文うへくし

○よりの切〻 河 大輔とのへとゝ云也殿の字とゐ〻とよむ也 或抄 童のう也

○きいのあまへくて 細 いつも宇治よりの文ハ中君乃おまへくてゝ乃給ふ

○此籠ハなを 花 金そひきをこをつくりてそうへ〻せうそ色とりうへ〻 細 童のめそ〻いへ也

○いてまれも 或抄 白宮の羽也ひきをこをつくりてそうのれともとゝ

○ねこハこゝろ〻 細 大輔よやまとことのうへハのこゝろ

○大将の 或抄 白宮の心也芦の作るまやとゝ云ひ乃也

○さとうよそれ 細り大将のうへはあまりよあてに
うくしく思ふ也
○あもそでかんよ 孟 白宮の羽也

○えうえう 孟 中君の羽也

○さいかんよ 孟 白宮の羽也
也拗 中君のさとさ泊瀬あまくさいかんよと

○あかつるて 幷 浮舟君の父の羽也

○山さとのいつせさ 幷 物ひとの晴といつせさ心也

○えうえう 或拗 父の端書也 卯堆のう也

○あかしうさと 或拗 やうの父まうしへさ人と聞
えなくわ也
○れやてそ 也拗 浮舟の父と目をとそくさてみて父と
いふんとう也
○年あくまりてハ 幷 右近う大輔うと人の父の羽也

○こよハいと 幷 宇治の住居のはてうしうあはれ
むとそめてさとといいそひのやうはれいくひと
う也

これのうすともおとし海あくて
そいでよこととうと父のはまへ
よおやうはべまでこうさり
こふらりくしうもんは
ど、おやとあさを泊てこのの
てそぶとをんさまへぶをみあり
てそいでうあはまうてあるど
うさぶ海はとこうもいう
そのうさはまうびおくはる
らんこそのいとあでこと所
かまのこうぶとおあさ
ーうまはんさまうこて

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

○さゝ好ける哥　浮舟也　花さゝ好りねはさゞ咲れねば
枝極よろ〳〵ろもろよろろんはねよろ〳〵ろ也
乗　此哥の心大ゝ心得ゝさゝ好りねと云心をゝ
一禎一義同之まろとろろんねよろ〳〵ろゝ不審
哥の心ハゝりがうちさゝ好りるゝやうの物いまゝ手
うえねきゝりのうれも君をゝ待ゝあよ行末とをゝ
待心をいさゝと云心ゝ愚ゝさゝ好きわ心の哥　横川
院百首隻部　泉ゝし井の末ゝ下ゆきをよゆゝ
好きハ衣手さむし蛬ハうをゝも後頼
○うくいろ〳〵ゝ　細　大将の文ゝとをゝひつゝとゝ
○うゝいろゝゝの巴数　中君のゝ下ろ〳〵ゝ文すねを
ろゝろゝとゝいろ氣色ゝゝゝ立ろゝとゝ
○女将うゝ　乗　中君の女房女将うゝ〳〵の云也
○ゝさゝ〳〵ろ　花　童のゝ也

○兄ろ〳〵ゝ　或秋　女将のゝ也
○此子ハ　孟　此ゝうハゝゝ乞ゝろゝのゝ
○あゝうま　細　中君の制止ろ也
○去年の冬　細　此童のうをいゝ了
○ゝやゝも　孟　白宮の此子をゝろゝろ也
○我ゝゝよ　細　白宮也
○あやゝゝも　或秋　坐下白宮の心也

○ふるとそ　或抄　大君の敷ますと宇治と旅れて
ゐるをとあやしくもひつるよさそはうの人とをしへき
ゐてのるとなひあくをなり也

○此文のるさ　花　此文ハ作文するのる也大内記ハ式
部少輔うさう道定名のうもろう下ようさう
也抄　白官中同名の人也
○うのとのる　細　芳れるさよ也
或抄　此道定ハ董の家人仲信う聲也
○のんなさき　或抄　白官此判道定よの抄也

○右大將の　細　芳うるととひの也

○いろめく　孟　大内記判也　寺とゝなよへる本有

○去年の秋ろ　或抄　浮舟と宇治へいさうひゐるハ
去年此九月也

なろはよはしづさことあで
のくまは世て、在持ゐらゞへ
いまするとゝるをそしてそゞ
てうをこそいてうくはろ
なるれいでうろづさことの此
ハ音いうくはらまてゞん
のこ時をあでくうくう
をさてまうるんさく
なうみうものはでのハそ乃
あるさゞろうあるもうもの
ふはもゐ此のゝ
ろうのびてゞ八

○さうあそうく 或抄 山庄の人を番役よあそうする也

○いとうれしくも 細 白宮の心也

○さうよ 細 惟よはさうろうくひ也

うつくしくへ給ふ を うちとけ
ぬるどおかとふるまゐ・おとな
つまふらひおもとづの人ふ
おかせてまいりつつもゆる
ものおよさ・わてゐでくて
あるうもいとのびてまゐさ
こまをおもろかひとゐ
給へ・てきめいとうまてる
うつうかとかりてゐ

○うこよりくより 細 此ゟを治定せんとて白宮の
うくきとの給也

○あまはらうるゑ 細 内記ノ判也

○此人ハ巴秋 浮舟ハ新造の寝殿よ住と
ありさまゆるゑ 細 白宮の判也 或抄 芸のうと
の給ふ

○花のおもく 細 夕霧也

うつのんてこいやうこゐて
よりわろおまうぐうひおく
さて・おまはらうゐんすく
ゆるるこの人ふまてそて
ろうるんぎこゐるもの方
おどもおまうて・ふらゐ・う
おまうひすておてゆきる
おて・さうおゐおどろおう
ているる人をすなたまて・
るをいてくさおうておぐの
人のおんとうりやた乃
おぐごの人・人りた

○うとうの母う里 或抄 大君の名残を与ふとなり

○さうう 或抄 芸の實う名をそへたるなり

○くまのう 細 白宮の芸とあさきうその名也

○此人ハ 細 ね記う族性をいう

○此心のうちよハ 細 白宮の心也えくよ此宮うそ名ふれ
ひくくそ定めくやとなり

○うの君ハ 孟 芸の心よ入てをくうハそへ
あうまうさと

○此ともうよハ 花 二条君ううとうみとのやーと
ふ名也
心をうくうて 孟 芸と中君と心とうくうへ也

まうらうもうーのひとまるんをきれぶくーおとともはまるべ
ーはそうのうちよハいまうてこのんをそへんうハそへもなぐ
かんうのさみれをうりまれ返
ちふるぐそのうちきんをはあうぐこのそうのいそぐと
うそふまうあんそうをうてくーおうもぶそもきうもぐ
うまぐおぐそのまをこのぐうおりそうのゆそふるいそ
かぐすぐーしぐうぐうぐうぐ

○のうゆそふるえん 河 賭弓 正月十八日也年始文人博
士うも内裏うそ祝の詩と作うそ下略
或抄 まくよ度こ註之

○可ゝ有ゝ之 細 親玉ハ如ゝ此ゝ、ありてこそ、のゝしる
ほどのありがたきものなれ、されバ自身の昇進するも、心どゝまるまじきとこ
ろ、ハ、ありがたきものなれ、されバ自身の昇進するも、心どゝまるまじきとこ

○此内記ハ 細 除目の時分なれバ我身の昇進の祝儀
をするのみなりけり也
○いそぐ心よ 弄 白宮の心よりのみとそ媒せり、不
可然也人常よ有ゝ也心うへし

○いとゝさ 取挍 白宮の羽

○こゝろえ 細 内記領状ト也

○こやうなるよ 世挍 白宮のむりなる人とも

○ありまろ〳〵 盃 内記ノ心也
○ありまろまん 取挍 内記ノ羽

○これともよ　巴扱　れ供の無礼心専一と　それ
ゆくゆくとこゝハ子細をいふ〳〵しと

○さう〳〵　細　白宮の羽

○こと〳〵　玄扱　白宮の心也

おしへてをくべきことなり　さてこの供
のものどもハ　いかやうにしてつれ
てゆくぞ　それをもしらずしてハ
いかゞあらんとおもふ　それ
ゆゑにこゝにてくはしくいふ
なり　さてこの供のものどもハ
いかやうにしてつれてゆくぞ
といふに　それハ　いかやうにも
白宮のおぼしめしのまゝにつれ
てゆくべきなり　それゆゑに
白宮の心にまかせてつれてゆ
くべきなり　それゆゑに
白宮の心也

○むかしもこの　玄扱　中君よりもひろく時の供
よりて宇治の案内者と

○出乳母子の　玄扱　出雲権守時方といふ人也

○大将をハあと　孟　是ハ芸の保證をとり〳〵保記よ
〳〵ととゝめおきてと

○兎〳〵さまで心と　花　芸の白宮を宇治へつれ
て中君よ中立ちするの也

○さいつと 或抜 白宮好色人こそ出ひありさまを
といいつゝと也

○夏ちく 河 心やすくさす心也

○あうさしの 或抜 是ハこの註よろし

○我もさもろよ 細井記也
或抜 井記もつやうにとゝんよし也

○まろうて　或枚　白宮のひさめ　こゝをまろうて
○まろうと八　或枚　内裏の判

○のろうて　或枚　えこうて

○うつしのひま　盃　新造の寝殿の事

○つゝとはさゝく　手あてうしをそうする事

○あるを　或枚　うつしのひま

うちよりそうをとりてまいりてわらべにおきてわらべ
うたうたひおどりまいりたんとまうべ
ていまゝてまつりやとそのゝかてう
ちのまわるをうまそ
うたうたひよりすゝきうく
なうもつまいおてこうきよ
どよつうたうれどもすゝまあろ
わうしてのまわうをうれ
えこゝてこんとうちまてある
もゝでは　盃のうちのみ
うみてそやうたうなあうたう

○右近と名のうし　或枚　海毋の女房也東屋巻ま
海毋の女房ま右近とうしへはなうし也されこゝこの
物語の筆法也さゝゝそあうつゝも諸枚東屋巻
まあうし大輔うむもの右近といふ如何其八中君
女房也

○うのかうをま　細二条院にて乃事八也

○ものゝ人〻言ふやうにの
おやまどなういとをそうもとれが
うれまづのうまどまひ
しそれなうつまをあうし
ものをうらびてさま〻右近てな
のうしうさ人もあうさ八
うのうをまうてやそのめ
うまあこうのこがまかうひ
ひうつさいてやうる海
めてさいのゆてこいとう
おばとうこのうんものをう
とそうくてとまをあび

○三四八　巴枚　さゝら

○右近と名のうし　或枚　海毋の女房也東屋巻ま
海毋の女房ま右近とうしへはなうし也されこゝこの
物語の筆法也さゝゝそあうつゝも諸枚東屋巻
まあうし大輔うむもの右近といふ如何其八中君
女房也

○うのかうをま　細二条院にて乃事八也

○ものゝ人〻言ふやうにの
おやまどなういとをそうもとれが
うれまづのうまどまひ
しそれなうつまをあうし
ものをうらびてさま〻右近てな
のうしうさ人もあうさ八
うのうをまうてやそのめ
うまあこうのこがまかうひ
ひうつさいてやうる海
めてさいのゆてこいとう
おばとうこのうんものをう
とそうくてとまをあび

○あてやうし　弄　勝字也上臈しくもれうる心也うさ
さとハいとをうまうろうさ鉢也中君ま海毋のゝ事
○對の法々さ　細　中君也

○ものをうとて　花　ありハめうとう也
細　ものをめうとそありわとうろ也
○うてまうせ　巴枚　母のうし人行て名山へ同道そ
未詳とめをまうりむうくうく

○朝日ろ　或抄　二月朝日比ろく〳〵芝のくさ也

○りん〳〵もせと　或抄　浮舟也

○ありし〳〵も　細　芝の自然に出ありしろよ出ちるひ
ろがりてハと

○むろひいろそ　或抄　是も浮舟の母房也

○汀ろうそと　孟　芝へ出ろわそと

○汀物ろうて　花　浮舟君石山へもうて給ふんともと
或抄　石山よりくり給ふくさやく〳〵宇治へ引ろ給へ
三条のあやそハ譲のやうなめんと

○又ありハ葬　又ある母房の羽也　ろく〳〵よいひろ
財也　細　今京より出給ハ不可盗芝の京よむく
給て後ろろくへもれとろく〳〵よいて

○此ありく〳〵の　花　母上のくさ也　きうハ急也　京やの窟
母君ハ姫君ヒありハ〳〵〳〵むくんとろ給ふくさ也

弄　乱毋のまうけひするや石山寺
もとゝいふ也

○毋まうと　弄　まことハ乱毋の名也此乱毋を宝治よ
りもちて京の毋れく人出しうるよそれさいふひ
らしてそのやうれ物もちてるをといふそんを
ふまり

○われこやうの　盂　白官の心也

○をそのこさまの　弄　白官れ官そ治毋のさし
へ入時つとまりのやうし乱毋のるまりしお
かりめりあくる故也

○官れ人そ　細　中君也

○くるまさうし人　弄　中君の方こハ乱毋をものやう
うねさうしうるてうさうやいふり

○ものこま　細　茅てよ念ごろうるく故也
或抄　又別の毋房れいふ也

うちもをろてこものをいのく
ものうんそいてあごくさ出さ
ふひうれ・右本
そこもいさりのそいてい
うのこうるれごうみ
ひまいおもちいごおう
おりまするかうらうべ
ごものおうでいこうのごよ
うこうそおいてまこと
まそいわまてこのごはま
ものやうまりいものおうぐ
ハ井こうまこいおごこうふ

○君をこ　細　海舟也

○この中る夕　也秋　中君のるをいふをそれもいとそし海舟の約也とその人の上いふこともうくもと

○うまいふりのしるく　河　親疎
花　そそくハ伊勢物語なと有詞也中君といふからの親類なれハやうよ似るひうんと自宮の名ひ也

○うきハ　細　中君也

○これハさて　孟　海舟也　うまうろ不そいとやうとハ中君よりへての義すくしうくかんへてのる也

○ようこう　哉秋　海舟の大くるりうともと

をどさそとうおにわびつてさ
ささくさ来ますその人よそ
おもうじいまいてもおもハ
めうの御てるをそもいのそ
うきさゆやもわがこのう
いてうんなどてまのごりみし
ぎくふうなんいてくもみへ
うをうひうかてやひうこぬる
よこそうぞぜおわてなる而
分まハいてこそおしうまなく
らうまぞよこれもろうこうで
いとをうしさうなわらへ

○ふくへさ　細　よそへゆくさしてそとう

○いとわてう　哉秋　石近り汀也

○活ともその一ふし 朝のかとともめづらしく

○日ふるそそ花 女上の車うちむかへの車とゝ也

○又せんやうも 或按 白官思案うちうしろめたく
格子とゝさして 業のまよとゝ訪也

おこわりてこゝろくるしくそのかど
よもこまかのそんいそぎ出
ともいひつゝ泊りはてゝうち見
とりのてこゝろものごもり
ぐてまてかちもあなぐて
うくゝねのさ泊ふもつゝみ
すらおくふかりてとうえん
かりてよゝそこゝわてぞ
きゝろゝみのおもろくつゝみ
得ぐてゝりひれべいとうう
ねいろくゝさをんおて
やもなれがこのびやふこゝろ

○あてうち 弄 上簡しさ也

○とのゐもり 或按 右近う業と思也

○ふやし〳〵 細 右近う羽

○ものく〳〵しう 細 白官業のまよとてとの給う

○仲信う 花 大藏大輔仲信八董の家人也道定う
ぎうとゝ

うう〳〵をゝゝさゝゝゝ
つまてゝゝゝとゝゝこゝはゝうれ
へかおてかうゝゝゝゝゝ
てゝこのゝゝうやゝうのて
おさてゝおうゝまゝゝゝゝ
ゝゝうゝゝゝゝゝゝ
かゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

○久いるろ 或秘 うらしをあそうる也

○ろりうそいと 弄 わとくよあひうりと云心也
孟 白官の謀略よ欠とうもさをーとそ也

○我人よ 或秘 白官の羽

○こそりうそ 或秘 過也ろさうりと云説あり比つ
りさも人よろそるよ白

○ろりくーさ 或秘 萬あり心と

まうびよをーもいてのべ
くれいやりひもうずろいよるろ
なまてついとうろおくゆそうさ
のあうつまだかやーさすご
よるうてもんやろてくみる也との
おつでおあいうでさあそまど
てやいうやりは我人よみとる
ふそそうよそんやごうとと
いとらうくーごさいそうて
りそうもおあうおたろいう
をふうのいまうひよまものびく
いうるみゆーさうのをう

○いうろうれをうさ 孟 過ぞいうるうダよあひおひ
ようそしいろさ

○わうくく 或秘 浮舟のちく近てわうくく退也

○れとものく 弄 芸乃れとものくも例ハ浮舟の
うされ女房ともいろとそ矢尼るーのうさよあて
ひーー

○衰るうよの 細 うろひの出ハ深切るれ志しいう
或秘 女房とものいふ也右近よいあーを

○あるうま　或抄　是ハ右近うまなり也

○あるひと　或抄　浮舟ハ茅ぶきのあるやどをたちいり

○いとつまー　巴抄　白宮ハ二条院にてまよひうせ
あそばしまし也

○らーめうより　或抄　浮舟の心

ぎぬのうへにひろきあをきぬをかづきて
ふるまひたるさまなどいとらうたげなり
もあまりまでおかしげなるまみ
ぎはのきわやかにもてなしたるなどいと
さおどろひつゝ猫のあだごころみをわ
るものゝそこにかくれゐたるよりも
あさましういとゞまどひて
ぐしたてまつるまゝにいでたつ

○そのあひだ　或抄　二条院にそのゝちのあとを白
官とゞめうる也

○うのこゝろ　或抄　中君のこゝろ也　浮舟の心

○くさうのう　孟　浮舟也

○右近さて　或抄　此供の人共夜のあけうるをまつ
と右近さて白宮へまいりて申ゝ也

○あるをかくれ　或抄　白宮の心也

ものうちもよおりくうのゆうの
つくりごゑなりひぐらしの
乃ち自ことのこゝろをあいよ
いようづくうのおがんす
おぼしなよみてひきとゞめ
ぐしてゞうかくやもなく
まてたゞやすくわのこゝろにて
をおぼしとよおさまで
ゆゆあくまでものこゝろにてこゝばく
ろうくんさてまいりてゞ
くんこゝろにおぼすわさ
なりよおこゝろにて

○いもろこうの 何 こひーるん後ハるよせんいもろ月
のさあてくへハアるくかーるん

○と心ちるーと 孟 白官の羽

○ととさるとハ 花 時方ハ白官の家司也出雲權守と
ろくう

もとこバるよはのとろとびろも
ろつぐろりつくてあるんるみす
もいもろうぐろう乃なろてるまと
くいまでおりーまるんふまて
よーのでやかるまびこの右
近をろよてびこころかー
とおりくれのべまだぐろつんい
つまぐろんあるそのこともな
まろうちろんまろよくく
ろくへさぶてこころこるへ
あてこるよあびてるんと
うぐーろんまよふへまで也

○ととあさるろり 細 右近ク心也こまくろーあそ白
官しハろわり
心をるろうまろ 或按 右近心もつてろーしとろあ
ろてれ ーろととあやろうーと

○ろあまろり 弄中くさてくともひるさ物以へよ
無礼るろへーと

○あやーろし 弄 白官のるてろろーる也

○もへ以ひろへ 細 右近このあり為とろそーくさ
ろをもろ也 母の物もうそせるせんとそひろへのさろ
へさと

○ゐてもとそも　細　白官の心也

○我八月ろ　細　白官の羽也

○ゐてもの　乗　白官の切よひ給ふ事也

○ゐてもとハ　細　母の子人の返事をいふ也

○母人と　孟　汝母を切りの色八人のそうをとる事也

○母をとる人　花　大水記をいふ

或秋　夜明ふることにつゐて人をいふ

○るをいと　孟　右近の供の女の分別をいふ

○ゐてもとハろんと白宮へ申されよと云也

ろんやいつてもはくみのいつもでいて人よとろまで
ことをだにだろうもおもへて
ことまでのみしこのかひなく
この人のことばわすれ申ざ
さうてまでおもひ出ずるもの
もとめてのべ。古今集てこのを
ゐて人をくなんの給ふをだ
いてこいるんとをゃき也ま
わさまでろづのあのかたも
ハさぶらひともくろかも
人ごものゆふこそみらぶで

。ろをなり 細 あ〜ていろ〜

。ところ〜と 弄 右近う時方とうへ〜ところ〜と
ろ〜ろ〜へのこうへとと〜へろ〜

。うう〜 河 勘事 勘當のう〜
弄 右〜ころころ江〜へうをそゆんと〜
或抔 時方う羽也ううれこいひうと〜

。ろ〜やうへ 或抔 ろ〜〜へとて 真實とう〜
我く〜し身とそ〜ろ〜〜

。ろのへうやう 細 業うろいひうてと〜也

。あうろいてをや 盃 後達の羽也

○あてもなく　孟　右近ノ詞也

○よの小使　孟　業とはてをくる業の小使ぬさまと右近ノ心也

○いし山ニ　細　まへの物へゆんといふハ石山のことを訓教しそふ

○さうもんニさうもくろう　或抄　精進　潔斎也

やうとておりゐまんよおのいつぎやらんでおのあのあくるとなどのろうぐろうもきこんよびいでかんとらひわろくろうおろうくおやくこのはつくひのわんうきのよいんまろうものこんさんくなくてくこはてたうんとぐてまろいひよまでもんとくそぐこのひくろうくろのはくぐうろうやのぐれいこあろしもてはのこぐろ四はきろいぐろくおれぐくしかでおぐて右近うらくはうまろうり

○時のまと　花　是ハ匂宮のる也
或抄　茎の心ハとくるまと匂宮のこゝろをしりあくを
浮舟の又ゝ人ゝさる也

○それと物のまと　或抄　茎ニ中君も也其中ニまた中
君のこゝろありていとゝ云なるく

○さくみと　細　浮舟の名のりとゆゝしく云なる也
或抄　中君のこゝろをこゝろえんとし羽ニハあり今
ゆゝしと匂宮ハ名のり給ふ故ニさくみと恨給也一説ニハ
さくみとこそ

まろき人〻をうへなきものにおもひたるよしなれハ
乃ち母君ぞうんかさるべし
おぼゝこるゝ人〻をとゝろかしうとくいふらんを
うとからぬ心ちにもおやわんと
おひしるよりもおやの心
ありもやきこえんかたくいとゆゝしきまで
匂宮
どこまでとうつくしきこゝろ
うゐんまのおまへにいとゞさ
ぞそこはかもいふるんわれ
なるべきこゝろのくらべ

しるき人〻をうへなきものにおもひたるよしなれハ
乃ち母君ぞうんかさるべし
おぼゝこるゝ人〻をとゝろかしうとくいふらんを
うとからぬ心ちにもおやわんと
おひしるよりもおやの心
ありもやきこえんかたくいとゆゝしきまで
匂宮
どこまでとうつくしきこゝろ
うゐんまのおまへにいとゞさ
ぞそこはかもいふるんわれ
なるべきこゝろのくらべ

○しるきハ　孟　別事ハこゝろをもてやうへなきと人のおも
名のりハ右のこゝろ

○むくの人　花　母のさとりたる人也

○さくみと　或抄　東国羽ニハ

○をのゝく　花　茎のおのくまとこいふんともれハ
京よさハりの人ゝれおのくまさあハるゝあるまさ

かくとさえいろみえ

○此くくうと 乎右近う女房とうちうひあへせる

○うへうきそれ 花 月のさとうめる也
或抜 右近う文の詞也

いひもんよ。ふるよさだうの
人のおうへやうにもどもそのばう
きうちひてうゑもけもこも
よそわとしおりひてこのべ
みもこよらひわをずそう
ちうぐうぐうちぎとさもあひ
ていうちおーこさとおぐ
なぞうるうにこもひ文又
さうぐくうへとさもひつまだ。
文だうりつしもまてて
うんおのうこそ仕こくうち
やーうのさ海とばやふ又

○きく八物の又うそ 或抜 物忌うそ来へまうう名文
といひうち也

○のくきさ春の 河久うさのひうめうきさ春の日
ユうろ心うく花のうう 春うきこうひく山の
さうく花又きこうあうる君うこあうる多

しそまうう仕こうそ。ぐぐよ
かのおぐくうもてくやうはわま
ざみうもくうおのいうそぐ
ひ仕うつこいうもてうまいう
ふーぐうくのこぐうろみぐは
をうろうひまうよ言うり
いうびーうのこおがいうて
ふよいうまてそまうていて
ようおうふまつまざうる
すくのぐをふ春の月お又ま
ぐおくうぐうの春ふまてお
ゆうまおくおうぐやうぐう

○こゝのくさハ 孟 中君也
○大とのゝ君乃 弄 々雫の六君ハ如此くさ
浮舟とゝ今ハこゝひうくゝ名也
○廿六又 細 白宮とゝひすゝくゝ也
○そゝり引ゝ 細 白宮也

○心ゝ外よ 攷按 白宮の羽
○浮ほよくて 攷按 此繪のゝくそゝ
○るゝさ世と哥 白宮也 心明也
○いとゝゝ 巴按 哥の註也
○ゝろつとゝゝゝ 花 今ゝり字治ゝひめ

○ゆくりかなる　花　二条院をそのゝ也

○心をハ寄　浮舟也　細金を見ハ心をいらゝまゝにさゝめきをゝふとゝみをうちそゝり

○うちとけんをハ　細　白宮の心也

○いとゝ人乃　取扱　白宮の詞也　但ゝさ是も心也

○えいとゝみるゝを　孟　浮舟の詞ゟ出ていひつゞけるを如此ゝゝゟゝゟゝ眼ゟ

○ゆくりなさや　巴扱　草子地也

○ゆくりかへ　花　夜ハ入てこゝろとゝろとゝみ左衛門大輔といひて右近ゟ知人也　乗　大夫也出雲權守時方ゟ也

○ささいのゝやうり　細　時方ゟ詞

ゆくりかなる　花　二条院をそのゝ也

○心をハ寄　浮舟也　細金を見ハ心をいらゝまゝにさゝめきをゝふとゝみをうちそゝり

○うちとけんをハ　細　白宮の心也

○いとゝ人乃　取扱　白宮の詞也　但ゝさ是も心也

○えいとゝみるゝを　孟　浮舟の詞ゟ出ていひつゞけるを如此ゝゝゟゝゟゝ眼ゟ

○ゆくりなさや　巴扱　草子地也

○ゆくりかへ　花　夜ハ入てこゝろとゝろとゝみ左衛門大輔といひて右近ゟ知人也　乗　大夫也出雲權守時方ゟ也

○ささいのゝやうり　細　時方ゟ詞

○名のみこそ　或抄　白宮ハ夕霧のむこそて後見
なれハ此門のさまにてハ我もあもりさとの
○ひゑ山よ　細　時方やうよりつとふ

○世こそ　或抄　是ハ時方ゝ私ニ右近よりいふ也
○きんたうの人　河　顕證　極信の人也　見證也
花をゝりハ一よハ見處の人と云ふやそこのうの
人をきんそといふへし
○ひゑのみを　細　右近ゝ引
巴抄　廿ハ罪ほろぼと云よりて善也ひゑと名を
時方のひゑのそのゝ名うそそこのつゝハやろの
そこゝ私といふハ時方の詞そこゝ

くなあぢかなりこともわろをゝび
てうちおぢふさこうゝきんし
もおもひたるんいこうこゝろ
いうゝくきゝもこまひろひ
ふひゑをゝんゝおもなん
人ふるのゝたつなどこうて
ゝそこつこうおもものよ
ハあまゝすゝろなくんこうの人
をさへまでつおそこゝをを
さへゝもおもこゝいひゑを
のみをさうきさこゝきゝもおそ
ゝれいゝこうゝとこうつもも

○いそうこそ　細　やうのかりこいそうこそ
ゝ
○うゝてゝ　弄　うゝて白宮のうせこそ
やうよこうてまゝ物をこいふ也こそハ
ハ宮とうやまひゝる心也

○あうこさ　或抄　ゆかりと思唯こさ心と無興
也危心ハ俗こうや
○まいりてさうん　細　右近ゝ白宮の御人よ集て也

○きよいるんと　或抄　京を心りよく与る也
○ところせさ　或抄　以下白宮の詞也心と云ふも
あれとも詞ゝ人し

○こゝろあへ　或抜　こゝろあへまじきなり

○さるにさかとには　或抜　さて〳〵さ間なり〳〵別而むつまじきなり〳〵

○世のつゝしみよ　乎　身上をもちそこなふ也　世の人のうるさしい我わやまちがとはをさして人のことをいふまわりのやうな芝人の我絶ろと思ふそ浮舟の上よりうまわりとこちやちがふなと自宮の思ふ也

わごやいでさかしらはしづきん今もえてぞりかへまじくるんおもひかねもいかにとすんさうづきがくいらひなどおやーさまでもーうもしろまうきさゆかるこゝろのへだてのさうまでてうんはづうまさいようやうのたちのよいすもものまじまりどをちうまぶをとゝうともさうずることらんおもをさへうんやう愛もんよさうきおそろ

○神の中うをも　河　古今あうさうしそその中うや今よきんとろくるのうのるさ心ちそろ

○世よさうをと哥　白宮也　孟　世やうろくありもうなし

そこらうみなよ　或抜　多ひて渡ーおうろんとゝ

まそこらのとろうよめてそまうんとうのおうさうてうりみさうづきがねいでおひうんとすもの秘のおうおもうおへらんうおもそてあさ紙をんでさうづさぬうさるまおのそ哭してえのでやうおうず

世おうらうぐまでこぐるものをうれ川間のををうたつおものうぐりおくあれと

。涓とを哥浮世也　孟ろうとうせきんとう
　其別をいうくとくめんとう

。とのうさめく河　ちのくめろかうろくとめをゆ
　をのうきなくうろうろひうきんく丸

。卅五位二人　細大内記と時方と

やりひろう
　あとぐをも行るさ神か
世ろそのていうのうれをそび
べさ男ろ・世のをともてか
ましく・おろうさあろうさよそぶ
さめづくもひやうかかろうろ
ろちらして・はるものろ行・
ろとやうまあさまし・
世ともものそぐぶとろぶさ
ろうとやりのてぐよ
ろうぐいづまこがもあろ
てひぞうまひあこの女位二人

。むうも卅道よ　或抜　中君よろひ行うも也

。あやーろうきろ　孟　何とそ宇治よ契りあろうと
　或抜　うさ里の契りとと昔も今も心のまうす
　物よひーぬへ也

。出物うろーも　或抜　中君の浮世ぬすをろて行
　る也

はしまのくちおかさぐひろう
さぐーさ山ちんとそろぐのく
馬よろのう行乃ありをみる
すろ乃ありをそこそろぐ
ものぐおしむーもこのくちあを
とそろぐくろ山ぐーおひろぐ
あやーろうろさんちぐうのお
とおぐと二事ぬおうりまして
世ぐのいとこそうしはのぐ
しもつもれぐとそやさ
よおをのぐりあろよ祢ろ私
さぐいてさびさおおりひ

。こいまろ　或抉　中君のこと也

。あづま　或抉　浮舟と云ひかへ也

。女君　もの云ひ　弄　匂宮の中君をのぞく也

。心ちそこと　細　匂宮の句也

。それありさま　或抉　匂宮の死後よの中君の心ばへ也

。人のかいは　弄　芸の中君よりひきつひかるをえんじ給也匂宮の浮舟を終よりあひ給よそ云ひかへ也

。もてなすと　或抉　中君の心也

。さくらさくるの花　中君と芸大将とのあそびのる也　細　中君の句大将のさそひ給てはと

。人も云ひより　巴抉　匂宮へ芸の心中を何と云ふそやとあり給んと

。まろかちなて　或抉　實よりその事也

○まことよりつゝしむ義 白宮の真實より中君をつゝ
しむあまりとゝ浮舟のゝとをうしなひ給ふまじと下よ
ねんごろなるの判也 一説 芝の中君をつゝしむあまり
とゝ

○人よりことなるさま 巴鈔 芝よりの句ひあり給ふとゝ

○へだてなき心 細 浮舟のゝとをあなづりなきさま也

○まことせの 巴鈔 中君の隔心にて浮舟のゝ名をとゝ
なへても宿執ゆへ不慮よりあひそふると白宮の心也

○まろやかなると 細 中君の心也 芝とのゝ人の
虚言あるゝとゝ

○おもうるさき 細 志この嫁娶の義分すて芝ぬしの
うちなびきまゐるとゝ

○もてなすべき人と 或抄 芝のゝ也 芝のとりもち
給ふ心ばえを過分よりてもてなすべきをやまちと

○うの人〻を 花 浮舟君のゝ也
孟 白宮の浮舟よりおとりてとゝ

根ぎと中君の心はハ芸ぬすることうひぶかと心得らるゝ也

○ありやなやと 弄 實否のゝ也 白宮ゟ文のいつ宮ゟ

○あるさま 或抄 二条院のさんてん〳〵也

○さのみの 細 大宮ゟの仏使の判 或抄 中宮の判

○久〳〵と 弄 二日三日と中宮の心ゟ久〳〵おぼし

○さくらゝも 或抄 今日中宮へ不参るハゝやく〳〵

實ゟ心あり

○るやまもる 細 芸の羽

○乃やうと 巴抄 中宮也

○ふろうま　細　白宮の活心也

○さころ長うろく　巴秋　芸の絶くまで待ひ
さもろうまあまろひつまでさころ

○ほいはさまし　細　草子把也

○のあひやなうと　巴秋　芸の實さをさあしと
やなうあくまで浮舟のうへひ出おろうと

○いてゆひんうろ　細　芸の約

○ころうをうろ　細　白宮の心

○我あり友と　巴秋　白宮と芸とを浮舟のありひ
ろくんまで

よものふるがつなくまがみ
てるんいやうかうのうやみく
きこしおくでころまうよりころ
さうざのいてまれだくぐ
なそびうまがらのおう。
こうありまろひでこうる。
さづくわれなうひをそて
そてやうのごか月日を
まうびさんまおど。
まいいまものうまのほぐ
よぶたでまいまろびうまして
ものうまものと称ざうおて。

ろうよのまひやうとうろ
まんありうまいうまのは
うまでまうのおうまいうろ
ぎよんまいまうんうまが
つぎうおぎろくまうろ
こうのさすかおまうは
いてわさつぎよ泊風く
ほうろ色ろまでまやう。
きまとそいでまもの。
ろうまでぎうろのうまいうぐ
ろ泊とうよりいうぐんぐ

○うこゝハ　巴扨　宍治也

○ゝゝさゝゝくゝたゆのそゝき　河　従者
花　左衛門大夫ゝ従者ゝこれ文と右近う方へつゝ
ゝう也時方ハゝの時ゆゝつゝさと云也

○右近うゐゝく　細　右近うゝ簡也右近うゐゝ人の差
の汚供そ参りゝと也さゝゝて我ゝ物ゝゝ

ゝゐづゝろゝこゝよつゐまつても
ゝごこのゝとゝゝさのゐまとれ
どゐゞいづゝこゝろゝもゐ
ゝまつていゝうゐまづなり
うゝまいゝいゝごゝさゝとをゝさ
あつ見んゝまひてゝろす　れ
ゞにゝろやとゝゞゞゝさゝと
う、左ゝ心どゞのゝろ扨
ねゝてゐんゐまう右近ゞうて
ゝまつまろゝ人のゝ所ゝもれ
ゞよいでゐゞゝろゝて扨ゞろ
ゞるとゐゞらゐのゝらゐゝ也

○月とゝろる　弁　正月のゝろ也

○うゝゐゝりのと　或抄　白宮の心也

○のゝゐゝ　或抄　二月也

○夕つゝとゝてゝハ　弁　汐舟の任ゐゝうゝ引ゐり名也
○こゝもハ　盃　芙ハ名ひゐゝゝあれと白宮のやゝゝハ
ゝゝてあゝま列ゝさゐゐとゝゝ

ゝろづゝんでゐゝ事をゝゐの
ゝゝ月もゐゐゝゝゞゞいゝゐ
ゐてゞおゝまゐゝこゝいゝとゝう
おゝゞゝのゝゝのとおりゞゞ
ゐえんゞゐゞゐ毎ゝゞゝゐゐゐ
ゝゝゝろゞほゐゝをゝつゝ殿
ゝ毎ゝゞ名ゐゐゝのゞゐふ
ゐゝうゐゐゐろゝゝまゝのゝのゞのゞて
おゝゝうゝてゝゝゝゐゐのゞおゞて
ゐゐゝ人ゐ頭臣四ゝをゐゐうゐ名
のゐひゐゞゝてゞゞはゝゝゝおゝ
ゝのゞゞゝゞゞゝゝゐゝゐゐゝく

○いそうろうて　孟　浮屠のごとくもちゐる也

○かるらるるもの　或救　白官のごとき也

○我ハ一ノ　弄白官のかずを云ふ也

もやはりこゝの事ぞ　言をまつ也

○こひねがふと　弄　芸の体をそこなふ人也有歟

○又いくさにて　弄　又芸人のかずと白官のかず
さんとも

○此人とは　細　芸の賤也

かんすることのかひそなきおもひをするもの
ちからなくしてそのかひそなきおもひをするもの
をさそふまことにさてぞ
さんとおもひながらこの人
ろこびきわまりてさてぞ
くおもふこゝろをいかで
ろうなどのをこがましき
もこゝろにまかせてぞ
のごとくこゝろにまかせ

○いてゝはまろうて 河心にはろゝひく水のさゝろ
いそそゝいてまきれろ

○えんろうろくは 弄 芸のえんるろうろくは白宮ニ御ろ
ろくをさゝゝゝ

○こゝろるくまろう 細 白宮ろうまろろくろ也

○ありとろろ 巴扱 海舟へ白宮の密通をこゝ
ろ〻 貫ろろくへ二入ろりろうろんゝ

○あゝ〻 細 白宮のろ也

うちの給つらゝゝくゝゝまは
まろうてゝゝあくなゝんのゝ
ろゝさゝ由とゝろろつゝんが
ろゝゝえんかろくゝさろのゝて
人のゝまろるゝゝあゝさ
こゝろゝくんあゝゝこゝろあくまろう
ゝゝおろゝぼかろゝ由のゝこゝろ
ゝゝまゝゝりさゝもゝんはも
あのろからぼいゝゝそあろ
あゝゝこゝろゝろのあゝぼ
ゝゝゝくんをあゝれ皆みも
ろまゝゝあろまゝゝくゝさ

○月ろよ 巴扱 芸の無音をろゝひろとろ也
芸の心也

○けろゝもろ 細 京一ろさんゝ之海舟物ありく
ろるろをろゝさあていろ也

○ゝろうへまろろさ 弄 宇治官も川へ近きれゝゝ
末の宿ゝそへ水もろろゝろて冷ゝくへ有ろゝ

ぎゝゝこのんよゝゝおもれ
ゝゝれおひんゝろがさ
いゝろうゝろゝもれゝゞもの
ゝゝおりのゝろまゝゝゝ
わゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝもれゞゝゝろもろ
ゝゞあゝゝろひろあゝゝ
するゝろやうくろゝゝゝ
てぎゝひゝひんゝゝゞろ

○うの人乃　細　白官も来へうとくしとゝ海舟心
ハきらうさ水のとうもこゝろのこゝろ
ばでゝこゝろまのこゝやもちてこゝろ
やうゝおをこれやがつるさつゞ
てもどのづくもつるもづくもと
このろのかどゝかきうめづくも
ろてんとおりのてのこまふ
もゝのんのゝどうかづくこゝろ
やりひまうみとゝさのみもの
つるこをゝろともつゞで
おゝとんともわつるゝゝも
うゝこふかびくづこゝかわど
うとやつくよわうゝ

○ゝ心ろんの乃　細　くゝ物うひろろ女とのて芙
のるくさゝてその所也　芙の羽

○もろろるん　孟　をろるろ心てハやうよ
まいろへきゝゝ

○朔日ろの　花　藤裏葉巻ゝもろるゝ也
細　汲てゝれとも無用也ゝ上旬の月るくし

○もゝさゝゝさの　哀秋　芙ハ大君のゝゝとゝひ出
ゝひ海舟ハ白官しるよ物をろく

乃ゝりぞふゝゝのまこゝゝとまる
ゞゝもゝてゝろうの乃やと
ゝりひつゞてゝゝゝ
ろんのうゝでゝのうゝれ
のどゝふうもてるもゝ
よまゝこゝせゝるゝあり
もゝもをろうゝんゝろぼし
てゝゝまでまうゝゞさゝの
ゝゞゝろのゝろ海もゝゝ
とゝゞ浜ゝろのタ月ゝ
ゝゝゝろゝてゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝの

○白鷺よしてふさぎ　河蒼茫霧雨之暮初寒
江鷺立重疊煙嵐之斷処晩寺僧帰　周居賦
白鷺とくさ〳〵白鷺とくをろ本に有識此句の心よく
かなひ可然猛同哥拙き鳥を鷺と云ふあり下略
花くさ〳〵云ハまろハ鷺のくちえたるしも此物語よ
鷺とくさ〳〵いひてさき橘を繪にうつしよハ
うつしもてもてさる白鷺をもて世家隆卿哥くさ〳〵
ふるやのつこ夕霜の雲井より白き峯ひをそしこの
哥ハくさ〳〵の色を白き物よさ〳〵ふれさり不詮
なくて可用るよしそ忘草を萱草といひ又忘草の
異名とも云つたへ
乗　大形鷺也こゝそハ鷺とゝこゝろ誤そハ不可有
こゝろさしのやさしきよりてをゝうへし幽玄の歟也

わうまろともおがみのぐぞんか
いらまうりたひらものうえをも
なげさうてくぐてまふりの
やうに　めのこいろとこゝでそ
さしもぐさ　ゆふてうえ
ぎのもぐでもぐろ〳〵いてお
うえゆふよ宇治橋のうぐ
しくまえこさうえよ　ふばゆふ
ふのうろぐゆさらぐゆふ
ふぐ　やうかてふれあてでも
のこ　うあつやうろあれぐ
ひえまてたぐよふをうえ

乃このぐぐ海のこうしてそ
いこうろんくとんうてくさん
そぐにぐぐてまふのあれ
ふくうひふぐさかぐまそ
うひこさんよえうえもても
こうふぐふうくものこうろ
うこやこふまのわうこ海の
しこもぐこうふくえまうり
うこうこうしれよ世ふさわふ
しろこうろのうろふもうわうて
ふうぐぐとうまこぐぐふを
さあ　れふひて

○いとうくふく　夜海舟　細
くそくえ

○こひさんは　或抄大君は仰う海舟ふれハ也

○都ふれゆく　細　海舟の句
乗　句中ひさしくの都ゆきうう心也

○宇治くの哥 細 さうしをもてゝ
攷按 業哥也 業の心をうたひてあやまり浮舟
我心ハくゝゝと浮舟をうたがふ也
○今ハあひてん 孟 是も業の詞也
巴按 あへやそむとん
○絶乃おと哥 浮舟也 細 ともくともこえまゐ
ハあやゝゝゝ
○さゝくらの 攷按 業の心也
○心やもとさ 孟 浮舟をむかへて心やもとゝ
もとんゝ

○いとようこそ 細 業の心也
○ありしよりも 弄 浮舟のうひまさりしを帰て
あやしく出る也
○うちよ文つかせ 巴按 内裏也
○梅乃え 攷按 催馬楽也
○もろこゑの 細 草子地也
○雪俄よ 攷按 梅乃えの縁あり

○大将人よその事 白宮のかしらのおとゝ也

○屋戸八重やまふき 河 春の夜はやこゝのへの梅花
色ゝそかくれねりやハくろ〳〵
○衣ゝさゝ 河 さゝ小ろよ衣ゝさゝこゝろひをや
ゝきをまろ人こゝろのそこ姫
細 浮舟のゝを思ふ也

○そこもとゝ 細 白宮のさゝこゝろの詠也 芝七大
さよハ思ひ給へさろうと
或抄 竹白宮の心也

○まろ人を 河 本人 古人 万葉
世抄 業平心ひとゝ

○ほとゝぎす 弄 先夜題をのろうて明朝詩を奉
ほとゝぎすと

○ゆくりなく　已秋　白官也

○うの君も　細　茎也

○今ころろ　弄　此年のゑ難心得ゑ也一歳句ゑりをく書ゑ句ゑり白官八若菜巻ゑ生ゑ出ゑ董紡の年柏木巻ゑ生ゑ出ゑ三歳の兄とゑゑり宮之白官の年ゑくくさゑて可然心ゑや是又荘ゑ時代相違ゑゑ古人と談ゑゑゑも有其類ゑゑ細案之白官八あゑくさゑの人ゑゑ九八ゑさとゑゑさゑゑ是作物語のゑ也

○さしもとも　細　政道のくさゑゑし

ふゑゑ心ちそ　弄　白官の句り毎いゑそくさ詩をゑつゑ出ゑんとゑ

○そくよみを　或抄　心ゑゑ也

○うの人ハ此年ゑさ　孟　茎の衣ゑゑさゑゑ巳ゑ年を白官のゑて句ゑさて宇治へゑゑ也

○ともまろゆゑり　花　春の雪と八待伴と詩ゑし作ゑゑり友まろ心也

うんそおまつよまつうれくゑ仕
くちらものごろいてくさゑよ
きこしめるくのもとものおぐ
かどそいまつてゑまろさる
もぐめやすく初びまされ
ゑらものさよういおぐてこさ
もいてくそんあてゑゆも
のおかしけでくものゑみぐ
のいもとそおゑてよ人もとうもろざしみぐも
よ人もとうもろざしみぐも
ゑやもくくさゑもそれ
ぐおゑうよぐゑからぐまそ

ゑんまでてゑみやれのゑと
ををぐれろこずのまれぐ
うたもきこのまこゑずいつ
かろくちろそくさゑとをも
のぐんとそうおのとおぐ
ようの人のゑろものゑもいてぐ
ぐろまこゑまれおさ
まくたぐろてゑりゑ。
ゑろはおまつぐろゑてのこと
ゑとちをふくて今まおやく
みろくさうのちもつてみさ
まきのゆうをつまをおぐ

○いろ〳〵 花 大内記ハ詔書宣命位記ヲ書
つかさ也式部少輔ハ獻策省試ヲつかさどる職ヲ
いつきもて〳〵つかさ職也

○ひさあき 也抄 そこなふこと

○うしこよハ 或抄 宇治へよてあやせんとし

○君しもと 或抄 汝舟也

○こうひいつかりくさも 孟雪と分て出ルよハ也

○むつまし〳〵 細 侍従也

○あつるうね 花 あつハ奥也うねハ心淺也
或抄 あつるさよハあつとハ云利也心おろそか

○うの〳〵乃 孟 差しひろめて也

ともの〳〵もなこりおしそうにみそ
うこうづゝかへりことをとゝ人思
しるべの風花いろ〳〵のの梅乃
ゑをそうろうづゝもくしもく
しるづゝうつくしきあづゝびうつく
ぼさゝう川わぎなどゝうなる
もおりうくりがこよハおハ
せんとおうつまでかうもおハ
とうらゝをそうはゝ舟のてを
日せうこゝうおさゝう
あくれゝもゝおりつゝ古を
いうふおうそうへべきはあゝ

こうひいつかりくさも 孟雪と分て出ルよハ也
ひいうつまゝさもゝとゝ舟べし
うひうまんうもゝまれゞおゝ
やうよゝうまゝくおいうつき
人のうゝうぎ海もおうあゝ
をうゝひていぐうつうあさ
てゝおゝぐゝうよそうう
おつていのてぐうりうとりよ
いゑゝてまうゝうのなぐよゝ
くまつうのぐうひせうおうも
りてゑづゝひおぐれゞうの人の
きうひよ仕てうんぐてまぐう

。夜ぬるかよ 或抄 時方久くまゐる也

。いとう〳〵 或抄 泊宿の支度をしろうとと也

。こハいくう〳〵 或抄 右近う心也 浮舟をつくるひゞきと
こハいくうと也

そもく、我乃ごとそこそ
あやしんもるくなるべもれど
そのくものもいとうまうまゐ時
うそよなどくなまして川
うをちかう人のあよおそおハ
せんとうまへうそれどもごそ
けうこうもろ、我つくろぐよ
まゐまろびとくうろうつてきこ
らあとこもこゝろよ〳〵ゐまゐ
ゐし、右近もいてこゝろあつて
しもれど猶そのまてゐさこう
こもつあくうまてゐゐし

。いそうさく 或抄 いそうさやくうまへうし右近う
せうといふ也

。舟よのりて 弄 宇治橋をうまうろへさ道とそ
うと舟うそこうろへ道とうの舟舟うそ
使るれハ也

そうこのゆさあそびそうをひ
のゆこそで、うひわづもろいそで
うあごもいひわてそこあまうぶ、さ
いづこそおもひつ、右近うこの
うんこよそぶうて、伯爵そそ
そまつふてうあどるうの
とわもうれうでよいうさあ
ゐのうゐそでぶーつうあうで、
はうあんそあもどうる
まそんゆこうゐばうゐぶ
そばとつそいごるも、
いとうそこあごうゐの

。あす明の月 細川行そうれ文作ゐう、二月
十日ゐ月とうへ有明の時分るれ分とへ之

此雪の名衣うすきさまにて時の雪よ似ようきてやそれものやうにてふれと其間かきをへ
ふくし

○まれう　巴捨　古来也こひろ来ふ

○うきとろく細　白官の訓也つゐよ雪霜ふを
ろうきりさふ

○年毎ふを哥　白官也
孟　海舟と白官との答うは終ようつしふ

○ろうしふん細　世の名よりやうやくまかめうしふ

月をまつかりて水のおりても
ふうなふきこのこまるんふちた
のもづまふもてはみづ
ろうろうをんふまへはりまり
なろいふのさ海てされろうさ
ふまのつどもろうもこふへ
いふろうかれどちふもも
づみろうのふつさをふこのおて
うふともろうんのちり
だものこまさもちろん
いそんなもづうんふちの
やうおぼふく

○ふろう花の哥注冊也　細　巻の名なり
或抄　心明也我身ゆく志いきうふん橘のか鳴うさきの
河古今　いまもうとさきろん橘のか鳴うさきの
山郭きの花　万葉よい橘の鳴又か鳴又鳴のくまふ
うふろうろう此系い白玉尊の在系也哥枕よい河抄
国とあり抄何但七瀬祓の系よい大鳴橘か鳴山城国と
注せり

○ふまろれつ　細　白官のいてきあて又くふさをを
うまと抄也

○乃なまう　巴捨　時方ふまろう乃ろ目也

○ちよいとあらうくしさ 或抄ちよろちよろ家のもちも
半作也
○あしろ屏風 孟 ちちうしろ屏風也
或抄 椎本巻よ奢江ぜり

○人のちとも 万水 海舟のちち也

○ろろろろ 細狩衣也

○あさをくさ也 或抄 ろちさをあさをちろうしろ

○引いろろみもも 万水 海舟のち也ちろうしろ是

○ちろうろろ 白官のち也

○ちちあんちし 万水 立へろうてのおへさまちろう

○白さろう 巴抄 白あや也

○ろろうろさう 孟 海舟の衣裳也

○ゐさゝうろを 細 右近う外よろ〳〵とゝろ〳〵うる也

○我名りとるよ 河いかうこのゝこゝ此山うるいさ〳〵川
いさとこ〳〵て我名りとるか

○ゝろえかよ 或抜 時方ゐろよるりてゐる也

○ゝ点引ゐろあ 或抜 やゝのりのをそれる躰也

○ゆゝゐろ〳〵 細 時方〳〵下知ゐる也

○うの人乃 細 ひゝひ大将ゐゝうちゝとをそむ
ひゝろゝとわゝをよゐかゝと

○二の宮と 花 芸のゐ也
或抜 芸をいひきゝ抜也

○うの乃〳〵ゐ 弄 衣ゐゝきと芸のをんゝ抜ゐ
草子地也

○いづくにつるる 弄 時方を此宿守のものどもにひきて
うつくを宮のおはしますにおくりてかへりつるをきゝ
つゝそこにさわぎの給つる也
或抄 かくとゝはいはゞつるる羽也とのたまへり

○その我をむかふ 河 ろくようのかりの川へのかりうも
ろく住ものゝあまのつり火
孟浩然のもろ〳〵好ふみ也

○山かつの 細 あをきまきの巻うもあり

○峯の雪哥 白宮也 或抄 艱難をへても道とは
きゝをき君よとそまつ〳〵と

○こゝろの里よ 河 山城のこまつ山よ馬のあれとうち
うつゝ君をおもふ 花 君をおもふといふ心也

○ゆうつれ哥 浮舟也 巴抄 中空とは白宮と業
との中を歴よいつゝと思時分也

○此中にて 細 一方ならぬと白宮の恨給也

○もゝつゝも 或抄 浮舟の心也

ろうあさましくおもはれぬべきことゝ
てうつろひ

○宮の名 汀のうつろふこと金て
まちあかすまにみえもてゆくことのはかなさ
ことのさまふるもあまたゞに
あやしきまでうつろひあてゞあり
哥

○隔つれ 汀 ほとりもものせきとめられぬべきさま
うきをもちうつろひのまさりてうつろふ
ものゝ中にてもうつろひてゞる
ものにぞありてのさやうに

○さてくふ　或換　白宮のみ也

○ゆりのいえ　或換　二日の物忌とのみて垂ひて宮人へ
知そしる也

○ゆうて　也換　右近う方うをそそう

○こまめ　細営也

○あやしさもの〻花うへ嘗也褶の字也そのをを取
ゆてしはやそうへ嘗のみ也
弄侍従うものをうへうを注毋君よう也

○ゆてそうつ　盃　白宮へ注毋の手水とまいりまう也
○姫宮よ　花共宮のかたうや

○垂ひて　万永　注毋を垂ひて主へむへ飲そんうと
くうへしのみ也

○そのかとうのくは 也歟 業とうあくれうと誓とさすがに也無理な不堅也

○さるは目のまへは 孟業まあひ好そくの約をは浮舟の返すもるをれハ目のまへそも我よりひろめなとゝ

○うつゝともさても 河根てさるさてもいとうさてさるさへうつゝよりをうとをもて

○いとくおかしうも 或歟 薫也浮舟のいとくおかしうもあしとをおかしうもと歟ハあしゝ

○やうの人さハ 或歟 以前宇治の事さも二条院也惣別きひありさの人さハ二条院とゝ

○第文ゝる 細 浮舟一の文也人をさゝめ人也

ばそておかしいとうとまる。
言をつまどもるもてい
ふやてうまとうもるもて
しまのもわてどいてがや
うさ。やうのうさいるを二條院
まおうもいまいまいま

○むまのはなむけ 乖 乳母の娘も又云常陸り娘の
る也女将事也

○心やとくも 花 白官の文をえ〻ん也

○くあやしき 或抄 宇治のる也芝のりそるまと待也
ず〻くあやしきとまをそ

○〻君も 或抄 海舟の母也芝の系(日下部氏)
〻あっをうれしく思ふ

○我心うも 細 海舟也

○あかつきうきく人 万水 白官のる也

○物かりそそ 細 白官の出ありんやうとう

○あやのふこハ河 うちよろひやのふこかまひ
とういつせくもあろういとあやしとも
細いりふあとその心也

○ふろせき 乖 ふつやうるる也

よあふさかのせきもうまとれ
ハあふさかとよんでありもちも
まれとありひかこおかちの
かちく人のはまをありいつは
うこおひのおひしと
どものりをよはくこのていさ
さまこちあでうるふんとる
つていこうそてあるまでおる。
あやまでは白ごろおかちの
ふいこくちおがこて。ちう
かくおがれまれおのふこ
いこうせきあかこそおこそ

○ほこせる　或枝　白官の文れる也

○ふくろやう哥　白官也　細哥の中と号やせて入る
　ふくろ

○ちよいとゝゝ　細　白官よりて心ひく〳〵まねく

○ちよろり　細　美也　巴掛　浮舟の心中也

もゝぐさ　或掛　白官のまねきて美也

○ちよいとゝゝ　或掛　白官のまねきて美也

○ちよろり　細　白官也

○ちよろ〳〵　細　白官也

○ちよろ〳〵　或掛　白官のまねきて美也

○ちよいとゝゝ　或掛　白官のまねきて美也

○ちよろり　細　美也　巴掛　浮舟の心中也

もゝぐさ　或掛　白官のまねきて美也

○ちよいとゝゝ　細　白官よりて心ひく〳〵まねく

○ふくろやう哥　白官也　細哥の中と号やせて入る
　ふくろ

○あやしうし　乗　白宮ハ二条院ニて浮舟ニ近つきよりし時のこと也

○まして我あり　乗　ハ此ハ方へ引とりかくしてし也　又いとよりかくと白宮ハ引とりかくしてし也　世ろく思ふ心のさまをそ　異竟　ハ心をとりこめ

○我心をさきを　細　我身と白宮ハ引とりかくしてうしさきと

○うの人な　細　ハ也

○うのよのうり　或抄　ハ文ある也

○うとまぬかうり　乗　白宮の文也

ろづうまこあやくれば
あやうりくメ言のうづり
ぐにうごひでうまあり
まてすぐわうぬりもも
わんをまうやうは
わりなんやとりひだりよび
ろうもうすありてうの人
ようまきてまうんをを
いうごうごとりひみだ
おうもうのようにうれ
うまうもうこわま
ばうをうりうをうみ

○ろをうろ　細　白宮へ引とりかくしてやとのそまろ也

○ととうろ　細　侍従ノ羽

○まろろハ　巴抄　中宮へゆきて奉公せんと侍従ノ羽也

○うろうの品心　乗　侍従ノ心とて　孟　右近ノ羽　ハまろろ人ハありまりさと

ろまこハ此ハ右をんかを
てうをうろうまうとうろ
まていうろうごうの丸
ろうをだひおうまごと
凡うごこのいうぬうぐ
うろうおれまうあぐ
やもまろうぐうれ
をんろくえてわじ
のやものまうて
まてんとあ右近ろう
ろうのやや
ようまれうれ

○うとと此哥ハ 或抄 白宮のうへハ不可然る也浮舟
の行末いうとも也

○心ひとつに 細 侍従とうるともよひうるもる也

○のうの山文 巴抄 芝也 日比よるとハともれて
かとねうとゝ

○をうるうる 或抄 此かとのとゝとうるうる
やらひおるとん心中ハさもやうとゝ

○水もるる哥 芝也 細 宇治のうるとゝ

ちかくにきてさぶらふをとゝろ
をうひおるによるをこの御ま
いとゝぶるにさぶらふかいでる
世おうんとするとゝてうるて
うる哥ところひうよりひ
うふれとゝもなどうるにでき
まうのうちの御ふみおりひ
るぶりうよなるとゝぶらで
ハさぬもなどうるにおんん
おうるうるおうるうる
ふるぶらさな

水まうるをうのまくらべなん

○うさるゆくゝをよ 盃 これまて芝への文れる也

○まうるを 細 白宮へのとうるゝ也

○もゝハえ 或抄 浮舟司白宮の返りと今日ハえ甘ま
ぬ

○里の名を哥 浮舟也 細 里の名と八宇治と云り我
撰ん哥より出ずいととゝいつ字ぬ也里の名と云
てうさハ人しうとと又重てうさといつ感有也
此哥新拾遺集題不知紫式部とあり

○宮のさぶらひし女 細 男女とするは誤也
○ゆくへ 或抄 白宮のゆくへは行末まであるべきさまをいふ
ことばと芝の方へよりて白宮のゆくへしれずなりぬるこ
ころへしれずなりぬるこころへしれずなりぬるこころへ
○さくらし哥 浮舟也 細 雨雲天雲両説共用之雲
ハゆくゑしれざるの也されば我身をもかくしれずなりぬる
也抄 二首ともに白宮へ也但初のハ口をさひよりのたと
○まもりもなハ 河 行舟のあとのさまざまハ
それハ水のあとにまかせたれハ 花 白雲のたえぬ
雲井よりもなをハいつまでかそれと君をしるべき
細 花鳥引哥雲よりくる哥 河海引哥ハ終よハ
身をうきものとおもひしる心あれハ浮舟の心よりくる哥
二首共用之
○さりともとひしと 或抄 白宮の心也

○まめ人ハ 細 芝也
○浪まくと哥 細 芝ハ一の返哥也浮舟哥也
河 なをしくるしひらをとひきたるをハ
なりそうもなある
○廿宮うへ 細 廿二宮也
○なめりとや 孟 廿二宮ハうへにて浮舟をむ
ゑんするを芝のよりてしる也
○ゑそこそさて 巴抄 ついせうの初也

さ海のこおりまでおもひやんこそ
まめ人にのこゝろおもひやるまもなし
あれにつゝみするこゝろもなし
やうそいふこゝろ
はまづこそ哥 細 廿二宮也
まめ人ハ神うへにてこゝろまめなりと
とあるをこゝろもそむる也
廿二宮の母尼のこゝろにおもひやりて
のたまへるこゝろおもひやりてうへ
うへもまめこゝろすゞかうへ
のろく人のほをおやこさうなるをそこそこそいふ也

○ひとうり 世秋 芸 道心あしき也 さうさう 廿二宮
いへよ世よ ゆうと

○ありとへよ 世秋 宇治よとをるとくへよ
をてをるへしと

○いるるるよ 拜む 上萬しく 殊勝の切也
孟 廿二宮の返答也
○うちよるく 孟 芸の切也

かるごころろうごうさまろうさ
まびよ世てとおりひねるびて
もてやかるこころうごう命
有めて世中をすごす例の今
そでもてんとおりひねを
くるんそもろよつまそらさ
うもとてるもればうとく
人もとせるとへのう人
まへこころうごうとうえあるご
ちちしてるんとまこてるべ
いてあるとふむころをねもも
もろるをとへくまかう

○これとるまハ孟 浄冊のまハるとるみかとと

○うふまとう 或歌 芸の遠慮ゆうき心也

○冊内記う 拜 大内記う 舅のる也

○さてつきて　也換　因續也

○いとゝあり〳〵　細　匂宮也

○ものもろさ　也換　下京　也

○さてひるつかた　八孟　冬領そくらう〳〵の家とう也

○月の晦日　細三月也除目ちかくて住よき趣ある人〳〵し
のやそうの日　孟　いとうれしきさまにもてなさんと
匂宮のたまふ也

○ゆめ〳〵と　也換　努と　又ゆめ〳〵

○さうなし　也換　宇治也さうなしと云を宇治と
あて如何

○さうなく　也換　領状すら也

○さゝら水あらハ 河 さゝらひあれハ身をうき草のねをたえてさゝら水あらハいかゞとそよ 細 芝のうへさゝらとゆくさゝら水あらハいかゞとそよ

○そゝろ 或抄 浮舟の母宇治へうつろふ也

○よのつゐ人くの 万水 乳母その子どもよ出て芝の装束するといふ也

○まろうの心ひとつも也抄 乳母の一心ハ芝一のそうの用意難ゑと

○もろこゝろ 或抄 浮舟の心也

○あやうくこの歌人 細 白宮の心ハそれいつこまでもろこゝろ

○八雲たつ山よ 河 白雲の八雲たつ山の峯うすもあハ住わび世よてゝ有ゑれ 白雲ハ雲八雲たつ山よりいつるそうろひさうろひや

○そもそもの歌人 細 白宮うゐ今月文のあるうへハすてゝそもそもさゝめてある人し

○うくく 細 毋の羽

○ひろあやしく 或歌 乳毋の羽

○あやしさうふ 或歌 毋の羽

○いろろ心ち 細 自然懐姓うくくとく也

○石山もとゝり 花ちるあれ心ちとゞへさうろ
るありて石山もとゝりくあるくいふれも
さうそいへり也

○ねりあさり 弄浪舟のう

○あくあきのうく 細 楊のふ鳴れ時のうとゞへ
をいうもんとうちわくく
うねてうおどろくまつふる
いつもわをこやをねつくしぜ
ろうさねに日どろわやくふもん
ろうるうさものもろこわうる
るあまりぞよをねこいつで
わやこうふおのむをおじや
わんこいうゆこちぐく
りてでんらもうねうまる
うこいつおどろうこをれば
うあるうこれて月のもう
あうあのうえをりひうる用

○こひめ君の 或歌 大君のうを弁の尼がうる也

○さうくさるも 万水 中君く白宮くの仰事を
ゞひろうゞて大君のうくうるくうるう也

○おくまさまく 細 弁のふ也故君の初くまさ
まうへく

○宮のくうの巴歌 中君く浮舟くのこと浮舟の
心やそうく時の巣こそあんとうて

○ゆふしほ　細　舟の心也　浮舟も同しふし

○うしろもよ　歌掛　舟の舟尾よりの詞也　浮舟ニ
舟の常住れ物ゆゑ

○そよまろ　細　来よ浮舟の出ぬく躰さそよ
そよまろうたへありうしく

○ゆーしほ身　細　舟ゆゑの詞

○ろやうよ　歌掛　舟うたへいまだしほみちぬ内と見て
浮舟へもろさとうしくしく

○うしろも　歌　浮舟の来へ所なのうを尾の枝と
○ゆふしほ　細　芝れる也うを蝶やせうと

○ありつをうしし 弄 弄の中立せしまゝありつを
うしとうつひしやうそと
○うさうさうる 弄 弄うつひしやうもうさうろう
るもうしいつ也
○のちいろれと 細 毋の羽
○ふもろくとるん 巴扱 弄の媒ゆくとうとく
○浴まうさる 盂 中君へ浴毋とまうせうとなく
旬宮のゆ心をとるるるをとうろく

○岬くやの 盂 旬宮ゆる弄ろ羽也
○さろとちろ乃 弄 中君よとうろ心也
○ゆゆふひもめ 或扱 赤屋巻よ大輔ろひもものの
右近といつろ中君の女房也
○さりやまりて 盂されいろくとく まりてと旬宮
よとうしさるを中君よろうまりつせそいとほ
毋の心中也
○あるひくつもや 或扱 毋の羽也旬宮のるいの
あろうろーやとうつ
○ようくくて 弄 業も女二宮をもち給へるれ
いろいとほん

○よくぬるを　細　匂宮のゐ給へりつるやうにて
うを見つるこゝろ

○人〻そまうさせ　巴掬　匂宮へ不慮あるべく
浮舟の身上をも我ハ為にこゝろ中君のまへと
あるかとよりくいやといふ心也

○いと〻心さま〻　細　浮舟の心也

○我方をうしろみて　或抜　入水をやせんなど
なり　岡川のわたりさまをとりて也

○うしろめたくも　孟　母の句

○年月をもて　細　年尼うの本は年月をもて
きうをあれどもろ心もとりかへすと云義ありい
くさ〻これハ我むすめを久しくこゝに置のうち
捨てをき給ふべきを母のいるゝ人し年月といふ
ようて前の義あれどもさて久しくといふべきあま年
月といふるゝし

○さいろう　花　日本紀云大山守皇子墮菟道河而
没哥云ものゝふやうぢの渡よさかしろうよやもん
人〻ていをこよせん

○さても我方　孟　浮舟の入水せんと思ひ也浮舟心

ふくもわれんいぐは又んと。
おもをかくおもひおくことを口あたまてまうぐべ
てあわうかくいぐとひ
きこゆこもまこんなてまう
ぎこまうぐひうすまぐも
ふぐ〻こうぐつまう。
るをうぐ方をうあのてや。
はるよまこくこまいぐさ
んとおひはぐうこのお
のをてのおうくまのぐそ
ゆとをうらあぐもわう。

○うちくへ　孟　入水せんと、思くもるすさま
哀秋　浪毋さ　今の心を思ひ〳〵む哀也

○さくへされいのり　哀秋　母の詞也

いくたびとなくこれおりひろあ
るぐてくへくよくへまでもも
わんいうつうの如おりひのくん
とよまるとおりひろくろさうろ
どろもわつまでうさとやみ
ろづおりひおさられでおうく
いとうかおのろづはおりひ
いかおうさ海とねろやうくて
つぐとおひでるやまをて
やをこ海色うをおのとまもひの
てきるでさいのうおで也さ勢
なんまうくへおでもとでさ

○ふくさ　川よ　河こひせ〳〵ふさし川よせ〳〵ふさ
き神ハうをもうをうくをうふ
孟　祈禱もいろまこひちゆと草子地

○へとくふ　細哀よりさんよつをそへとくふそへハ
うりへうをえ〳〵ねるさと
哀秋　母の詞也守治の任居へとくるそ心もる
今まいりをくるとも族性をも吟味一用心とへと

○やんすうさ　葬　廿三官の出方るとへ上臈そうの
えへもるをさうりともようねや中とおりて泣く
のへれろ〳〵ふみる出うんと心つひせうと

○うこま　細　次将のわれまうむ也

○いとものゝ心ぼそく　細　浮舟也

○四ちのおやぐ〳〵　細　浮舟の羽母めの人行ときこゆ

○さうん　細　母の羽

○りこを　弄　次将のつまふむありのすさび也

○此人〳〵も　細　来〳〵出たりてうるさくもあるべきことゝ

○さをよのこゝろよ　河　催馬楽道口律　見知乃久知太伎不乃古不余和礼波安次利止於也尓万宇志太也古呂安次比乃加世也左支無太安知也　細　りつくよねぐ〳〵まもるらん也

○ろくろくと　細　芸の文也羽

○宮ばさの文也羽　細　文あしうするくし母也てゝ有しゆくよ返るをりたいねるろくし

○いうよねぐ〳〵　或抜　白宮の文乃羽也

○在のるひん　河　浦なるひさよりな里也あまのさくものをうら心ようさゝハ　弄　をゝのあまのかりやくいねをといふん号くねさまするひさよりの音也　細　一方ふさまりの名〳〵と

○ろくろくしさ　細　ろくろくろ也

○ろくろくと　細　芸の文也羽

○宮ばさの文也羽　細　文あしうするくし母也てゝ有しゆくよ返るをりたいねるろくし

○いうよねぐ〳〵　或抜　白宮の文乃羽也

○在のるひん　河　浦なるひさよりな里也あまのさくものをうら心ようさゝハ　弄　をゝのあまのかりやくいねをといふん号くねさまするひさよりの音也　細　一方ふさまりの名〳〵と

まりうさうんをうをくしさ　あのかで分ろ也たりそいとをくく仕まうでおぎのさてのしうよ。殿の御ことなもあり。うあまりしきまでしたるまでぐことぐひおてりうぐくおひんをうりあるさうりあるひさよりな里也あまのかでのろてぐさこと。うんこのかでのろてぐさこと。うりくうろ〳〵とぐあり。えハ浮のかろもうりをかあ男とぐふろ。世のるびんさもうろあてくうんいてぐ母ものさ

○取わらし目さわひ　花　長雨のころの也
細　まへのと同使也

○うのせうそう　年中式部次輔ク家ゝそ也白官のろくの
式部次輔也大内記兼官也此次輔ハ芸ハ此ク
ろくむこ也　或抄　白官のれ使ハ時方ク従者とまよ
あり文をハ大内記よりとゝとゝくゝり仍而せうそう家
ゝそ此ものことをゝくゝろくし
○まゝゝとハるゝゝよ　花　まうとハ真人也人を穣と
なる羽也　或抄　芸の随身ク白官の使をとゝろ
○ゝゝゝよ或抄　白官の使ク羽

○ゝゝゝの人　或抄　芸の随身ゝ羽

○まことハ此ゝのゝの　細　時方也出雲守の使と
ゝ

○ゝゝゝ　細　此随身也

○さゝりのゝ　細　時方也花衛門大夫ゝそ出雲
守をとゝる也古系圖誤あり花鳥も時方ク家
ゝとあり古来ゝまよりのゝるゝれとゝろ
ゝとる也
○又やまゐりて　盃　白官よまゐりを童ク付入
ゝとゝ
○さゝそゝろゝ　或抄　草子地

○此房よりて　或抄　海舟のゝつゝ此房ハ時方ク従
○ゝゝひつ　盃　ゝゝゝりゝちゝふゝと
○ゝゝゝ　細　此随身也
○さゝりのゝ　細　時方也花衛門大夫ゝそ出雲
守をとゝる也古系圖誤あり花鳥も時方ク家
ゝとあり古来ゝまよりのゝるゝれとゝろ
ゝとる也
○又やまゐりて　盃　白官よまゐりを童ク付入
ゝとゝ
○さゝそゝろゝ　或抄　草子地

てゐどのゝおどゝまとハゐゝく
ゝさゐゝおゝゝゝ一日さゐひ
ゝゝゝゐゝひどゝゐどゝみも
ゝゝゝゐゝゐどゝゐどんゝ乃
芸衛ゝ家ゝてゝゝどゝゝるゝの
ゝゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ

○しもつかの人　巴被　内舎人也並二の随身也
○ものまいりつど　細　六条院へ芝の生浜至

○あやしさるの哉次　文の哉次の人を随身の戸辺

まれびとの人のようにあるべき九
まをんぞらおしやこのまま
うえていまいでくるんとすらむ
ようそてまつとをとて
らまいるよまさらのうえのらでを
おくるろのれば
まれびとくくぞんなど
あまてもおしやまつてする
んなおやまとのおうつるべき
へまるんとていまでさぶの
つるいとおのまをおてあと
のぞおまおにまどとひ

○山人の細文ようつく人也

○ふうつくり　細　子細あるよし推しはかる

○なやさいるよ　細　明石中宮也

○うの内記は上官　河上官は政官也太政官之被官なり
故也上官とは宛字と書なる也
細詔書勅書宣命なるのようにとなる文武部
卒輔なれば公務よいまるさぶらふ遅参なるを
○奏文を　或抄　内記をうくまいり此文も速く奉也

○ふんぞん哉　細　六条院の中うの人し明石中宮おとりまきとうの基盤所なる人し

ぶらまとのの人のうんもつてまし
とおりのてでとまりてお公
もうろうつをおてでおおお
まやとのおらばるやまぎり
おりまよてそうもこの糸
おてでとまうおばくまう
ほどのてさでまばでこる
ともおりまぶぶの用紙を
どうんなれぞそれでまれ
ろこのおうともそまうをえ
ばらんぞろうおりまてど
ぐらまうまでとうおを有

○ふぢつぼのこうてう　細中宮のおもとの也

○文ニ心いれて　孟　白宮の脉也

○おもと　弄　夕霧大臣也

○こうてう　河　曹司　府曹司也
細曹司と云ふあれと障子用之

○おもとらい　或抜　芸の抜ても云へし

ひまのこうてうにて　ふぢつぼのこうてうにあそびたまふ
うらうらとのどかなるそらもてゆきて　女ちよもおなじつぼにて
もおなじとこにやすみたまへるさまうつくしうおとなびたまへり
てふ　川あそびなどおもふやうなるいのこのまやうなどこまやかにうちさゝめきて
しとねなどもてはこびつゝよろづにもてなしきこえたまふ
もちてきたるおとなおとなしきわらはなどおほくそれば
こゝろにいれてもてあそびたまふ　やまぶきうつくしうさきこぼれたるを
をりてまゐりたまへるをとりつぎてもてきたるをとりつぎて
ふぢつぼのこうてうにもていきたるをみたまひて
おもとらいなどうつくしきほどにてあそびたまふ
うちとけたまへるあたりのけはひなどいとをかしうて
あるさまどもいとよくみゆ　弄　夕霧のうへ

○此ものがたりて 細 美也

○きしさくらつる 盃 白宮の文と又ところてつのやうをたゝ将へとうとうと随身をめとく次ともをいはいまろうと

○ひろはん 敦敏 あゝきさくらつるはいかゞすべき美のもひ

○きさらの宇治よ 敦敏 随身う羽ありしやうを語ひと

○紫のうへう 花 桜をよはう紫るれはうへうの色もさくらあるへし

○君あやゝ〳〵 細 美也

○あり〳〵あくまろ 敦敏 美の心也白宮の又あつて文をひあくをひと

やうよひあつうをいかゞ。
もろべてをひあつうをいかゞ。
ありあくまろ。
ときあゝおがてかの也
ことのやうめてうぐいれ
ハんまんぐ。ところいぐ
ひあつうをいかゞ。
ありさきのいとをひと
るんひあつうをいかゞ。
しあのうはたべてあし。

○さてさて 或抄 一さてあさりのこと也

○さてといとおそろしく 万水 芝の退出あるべきを
白宮のことと也

○あの中ひさ 巴抄 好色もうおくしさんと也 ひさ

○あさうをれ 或抄 芝のうち心あさうと

○あやーさまそ 或抄 むり 中君へ白宮とちと不
ひしりそ

までこそとうんをそとうくしと
ぞ也でこんじきれいにくうく
ものおそぶこちもそぐるをいて
おそろくしく思おくおうすると
なやいあうきんぶでおさう
こんおうくきおひきんいぐぐ
いひうおきんおきびろおう
そくきのとぢまされる
うもわぐぐおりのおうこそ
おさなをれそもうおうおう
まうそさうとそぐとものお
そあじくうへぐやなそて

○さうはろれは 或抄 中君へはまへくうう親眤の間
うれいさくへあやうろうありともくよんとうめくて
やうよはあーとそれをも我心よとうちてまうと

○さうはろれは 或抄 中君へはまへくうう親眤の間
うれいさくへあやうろうありともくよんとうめくて
やうよはあーとそれをも我心よとうちてまうと

○ちいのおさ 細 中君也

○さうこころのうちは 細 論語 内省不疚といふ

○岫 ころころやまやまく 孟 さざいの官のる也
或抜 白官岫るるやうなるる也

○なてととろころる 或抜 白官初て宇治へゆきて退
留り給ひし時のる也東山よりもみぢんしるるる
るひしとさのる也

○そこころとるく 孟 岫るよ付て白官のるやうなる
乃ことふかくなりてこころる
芸の推しる也

○むりとなりり 花 白官のむり中君ゆりくんう
うひる時のる也

○あてくさりのハ 弄 ささんのあてくさと

○ゆうとろろくハ 巴扱 浮舟のる也

○岫官のれくて 河 具一具の心也
細 浮舟ハ白官の心具てそろくさと

○の心ち 弄 遠のるるの心也

○やんとる 弄 本葦るくせんよて火のるさ
もろくくめてろものそハなゆるてんとと

○女のいて 孟 浮舟の物ゆひのやうを芸の品合也

るうけざなうまれこのびくく
なやまくおひてきいろ
もんをびさまぎれおいでつの
ろとうさやうさんお
つやうあまんいてろうかる
きさうちうやあくて
おてどろるのらきてる育
もあうてきこかやう
乃ことふかくなりてこころる
とおくるやおあのべしく
とおぎいづふものえおう世ざう
しかごのかぎさとくおしも

うろさうとうびくおもなる世
のいくあるひらる面なし
もこうこころしろおて
ろづおぎあるよいた
わくぎものくんのるは
わるからそよおやる
ありとかんおふろ
しろくんぐこの
るやのほぐてい
るろしゆひものゆづはぐく
のくこらおいでやしごお
やしろろくんろぐて

○うのみやひとう　孟　我捨とさまてハ白宮へ〳〵
　ゐんさと〵

○一品の宮の　弄　白宮代をさう人と一品の宮よさう〳〵
　そせそそやつく〳〵ぜそそ浴類ゐや浮舟ともろ〳〵ん〵
　〵

○さて出さう　細　さろうそ一品宮よ宮つ人と出さう
　うとこさてていいとゐつ〳〵〵

わうあるをさうのそてそそんん
いまはさてんざうんつこいをん
しろづ〳〵へさろ〳〵いろく
ゐこころおもちよおびとつ
そづくゐりひかうてすてさき
〳〵ぶうのこやとびう
〵ゐひそんへのたちなのて
おーさともこおびう
さやこよおびとへこを一ホのえ
のはつこよへ二三へまつをお
るれおそ出さちんちんさん
いとをくなどうをそてびく

○もこさんろう　細ぜ〳〵財とんへ〳〵ゐや

○ろちさの　細　芸の判　仲信ハ芸の家司也

○さろん　孟　随身の返答也

○宇浜ハ浜ゐよ　或抜　又芸の判也

○道定も与ひ　細　さこもさこよ〳〵の
ろちさハ内記ろ也

○ろこさう　巴被　人よろさてハをこ也と〵

○少輔ゐ常よ　巴被　随身よ大内記ろ芸の仮辨を
ろゐ〳〵と与ひ合ろ也

ハこまこ面かこて御ようこ
もすきこの法ありようせう
こちさごの約ニおとるのび
ゐ御やうふさろん約よ
へいろのやこのうんあのこハ
やろんうとあてゐろへ今れ
ばんちさごもおりひくら
とうちうあさおて〳〵ろんし
でをろもおこあうとのろ
うこまてが御ごひかいの
此事あへ〳〵うこのこさひ
も。おりひおろすれ〳〵のあて

○うしこよハ使の 孟 浮舟の心也物ゆゑ多く也

○うしこゝろ寄 筆也 花 古今 君をこそおもへ
心を我もさハ未の松山波もこえめ
細 我をこそまつらめとやうしをこうまし
○人よりもうしを弄 此ハ此こゝろ寄の心をうしと人よ
りもうしを云也 官のうしを号る也
○いとあやしと 或抄 浮舟の心也

○うたて 細 筆の真あやうしと号る也
○もてそこと 也秘 うしをもてなやみうし舟乃
心うしと

○うしこよハ 孟 浮舟の心

あんもあやしかりけるこゝろかなと
乃やうにてどころたにへのやう
よりんをこゝろもこゝろんおやくもの
まくてあるにまもとうおもへ
てこそまも里ハ思ひてさすが
にうしくもこゝろうおもくく
んをうしろめたくおもくく
ゆゑもおもよそうしとうしろめ
そあるまゝなどの
やうにうしきをうしこゝろ
いとうしろめたきをもてあつかひ
きこえやうもあらぬさ

○とのゐ文ハ 盃 茎の文を何とそ〳〵ゐそ〳〵
とハいまゝ〳〵さすと右近りや也

○ひうちも 盃 浮舟の返答也

○うちとの 細 草子地也文をあもそ乃ろう也

○あるいとを〳〵 或抄 右近り判

○文乃ろうとハ 或抄 茎の文返てうをと右近乃ろう
とハ浮舟ハやうゝを茎ハ北かさきんのおりさすをゝ
のそうしうをと右近うさてていうと浮舟の心也

○此人〳〵の 細 右近侍従也

○ゆさうして 万水 侍従と右近と二人して物語ろ也

○右近うあはの 乎 右近常陸よつさてそうし時の
るるろくし

○かとくよ 乎 上も下もうろうありとゝ

おうくいてくおのかとろう
右近さそいとの〳〵浮つこいかなどそ
ゑいまゝ〳〵さすと右近りや也
ゆ〳〵いさ〳〵ゐうあるりのをと
いいとひてくのうやういかゝ
つまいうろうくうそとの
あやゝとかまれいかうちやまを
てかんまうりうそうそずの君
をでさまやおうつとらいそでおお
おいとをゝうきれ事ごふ
こそ侍ほこのふものうきれ浮
うんいうろいでとうよおりてさと

おうくいてくおのかとろう
右近さそいとの〳〵浮つこいかなどそ
ゑいまゝ〳〵さすと右近りや也
ゆ〳〵いさ〳〵ゐうあるりのをと
いいとひてくのうやういかゝ
つまいうろうくうそとの
あやゝとかまれいかうちやまを
てかんまうりうそうそずの君
をでさまやおうつとらいそでおお
おいとをゝうきれ事ごふ
こそ侍ほこのふものうきれ浮
うんいうろいでとうよおりてさと

○さてまれも 乗 此るありしよりて夫婦離別せる
○あうつつの 乗 常陸々う島ホも今の夫也こゝろ
されうう男也
○うさらうとく 乗 後の男をところ〳〵うとく
うて他国〳〵う也右近うあひの本夫也

くぐつ〳〵こまでもうきもてう
めてころつぎ〳〵おてぎりひまぐひ
て伊勢なぐふめぐんな〳〵今のうさ
よ今をさ〳〵ころう也まうり
てぐ伊勢くうきみ狩てて
はあふ〳〵母のをぐろうてて
ぐ〳〵さてさもすこ伊勢ぐ
ありめさ〳〵もいうでき
ぬもひろうあひはまさ
このあやまちろもぐまさら
ぐうなれどうろわやまち〳〵ろ
ものをいぐでうはぼうんさて国

○母のうく〳〵さ 四枚 母のうく〳〵うとてこれも
をいろ〳〵ろれ〳〵也右近うあひの事也
○まてをいまよ 花まいうの女ん乳母と云也まて〳〵と
乳母どいふや
乗 注舟君の乳母とうさ右近うあひと親類うや又右
近うあひの乳母ぐもいうまうそも
○ゆ〳〵さついての 表紙 いま〳〵〳〵さうろれとも

乃うろをもおいうろれやおぐて
あのうぐ〳〵さぐとそぐさうろのの
うろうもをいまつぐうろ〳〵ぶ。
わうぼのうまうりてぼもいま
まうひあさ伊勢つうくうて
ん〳〵さつぐでのや
よ伊まぐでぐもてのろうすぐう
のうとんぼぐ〳〵みぐろふいうさう
まぐさうぼのうちまぐでいわうぐ
とも人の母やぐろくようまで伊
てろう〳〵ろ母まうろうぐろう
てもぐきん人のいうわいまく伊

○ひとうじくよ 或抜いろ方へるうとも一方をひきあ
ぬくと
○ひやもは心さー 或抜 白宮よは心のひくと云いて
右近うかくいふ也

○さはうえの 細 えとは毋をいふ也

○それうこうまこよ 盃 芝よりはむこへのまくよ
白宮へとのぬらー右近うと

○今ひとうそ 弄 侍従う訶也

○いとうそうをす 也抜 白宮のる也

○人のうおり一 花 大将のむこへぬくんとそ乳
母るものいうくるをいふ也

○はらひのまうせ 盃 汚舟の物切めうろう
うへうひをふへと侍従は一向よ白宮へと我心の
ひくまくよ也 或抜 白宮へとうとも芝へとう
とと志のねうんうへと

○いそや　或按一むさよ句宮へともいふこと
いひてとそうくよ無ふまと觀音といへる也

○いろこさねそう　河　ねてう　不調
盃　ねそうく有本あれとこもそう可然無道の
者ととと　或本ねようと
○ひとふい　河　一類

○うとのり　花　内舎人帯釵具兵杖武勇者也
兼坂東掾也　乗　向云いうやうなる人の官やう
一呑　内舎人とくさうひの品也帯釵をる官也

ひこころまつ　いなや君をそ
もくても　とおくすこそ也
てどころをうしなどま軽を
なんそて侍　この大将分のはさう
のんぐといふものハこさぬさ
うのものどもまてひとこいとの
さとよんらて侍るやうやうこ
このしろやまこよこのこまや
じおとろづくの人なんこま
このうどのりとものゆりを
つ侍ものうまでしてあうんの
なりてとりのとやとそして

○やまちも　盃　句宮の四出と番元ク三ハと
○あり一夜の　細　ひとよのみありさもやうう
一と

まろづのことをこそおもて
まてうなるとこきこの人のかな
どちハなるけなきこと一いで
ととおぼさぬとも　ものこころろ
えのいるんぐのものぐすて
こころくさぐこぐのぐんよ
あるてい侍こなるもあう
をぐおぐおやまちもしい侍るん
あるて一夜乃ありさいとて
ひくはまくありてまくら
こやハようおくつまてぬて
おとものんものてあうまさぐ

○やつきてゝ　盂　白宮のそのをおハせつるをと
いふ也

○をとゝれを盂　白宮よ心うつろうと此くの
ようろうつきと汝舟の心也

○こゆめやうよ　弄　白宮の躰といふを

○このこゝをして　弄　莟のつゞ

やつきてのこおつますをさゝものゝえつもそてまつろうんいと
いつでくかんとひつでうを、君
をとゝれを盂　白宮よ心うつろうと此くの
ようろうつきと汝舟の心也

○こゆめやうよ　弄　白宮の躰といふを

○このこゝをして　弄　莟のつゞ

○まろハいそて　或挽　汝舟の句

○をとゝうくの　河　忠臣不仕二君貞女不更二夫史記

○くうのあり　細石近句也

○あり〳〵おくき　或挽　ゆくゑもくうをもうろ
ひうをそのうろくとを

○此ゝうつの乃　或挽　白宮のつゞ也

○まろハいそて　或挽　汝舟の句

○をとゝうくの　河　忠臣不仕二君貞女不更二夫史記

○くうのあり　細石近句也

○あり〳〵おくき　或挽　ゆくゑもくうをもうろ
ひうをそのうろくとを

○此ゝうつの乃　或挽　白宮のつゞ也

ひとゞうれまおうろうとともでて
さうとんともさしはくごとこのの
あうりまろいいでゝもでや
ろづどうろうりをうあろふ
おづのあうおづもおやくやを
わるとそうろうかおうづ
おづありおすうおおづを
とそそそきそそもおきおづ
ろづさうとをもさうどうのを
のづふんとをおうをこのこの
はまのうちいづくうをこのこの

○心ろくろ　或抄　右近侍従など

○乳母その心を　孟　乳母、何をそろそろ苦しげにうれ経営を心よりてそろそろと

○ろくろくせよ　或抄　乳母の詞新参の女房又童などをろくろくと

○このあらし　返すと　或抄　芸の文と有ようくりとそろそろれ方後をそろそろと訪ねる也

○此抄ろくろく、巴抄　右近侍従と物語ろくろうの也

○このよし侍ろ　細　内舎人の詞也

○さうしとを　河　雑事共

○ろくろく　或抄　海母のろくろくまでそろそろハ浮月をそろそろれとものせつそろそろと

○ふくしき　反衣　よろひなどの

○うちかけ　長袴　内舎人ハ不着ものと

まうちとけたるつとめなきこと。
このごろはきこしめせバ世間の位
りよきもつよきものゝくだくる
やうなるんぢきこうしやとてある。
ふいごしきものゝやう
きぶつなりのごもいそのわんのい
とのきたんきでいそぐ
きぶつぬづきしごもありひつよ。
うけこゝろのことわれがおのづ
ハ分のやまひとりくわうてのる
ほうもつことに月ごろとう
て仕まつりがんるもの仕ぐ

○さのてさ　細　さやうのてさと

○ひしやうの　河　非常

○ねうこの　河おそろしき山の巣と云世俗言有
事右近う心は巣とおそろしきものよひ
う也世の心也

○さうやさてさ石ハ　巴投　互ひにとりあふ
ハふるとも芝ふるめりとも浮世ハ上也

○乳母ハかの或秋　廿房のうへ　ちゝみ人のうへ
をいふ　をハさゝえて　番をもらすなよとなん
もあるハ番の時うたゝねすなとをいふ也

○名ある男のうへ　河　皆代官也

○もよゝ今　或秋　以下浮舟の心也

○こきのゝうへ　河　君よあえんの日ハいつと
いつの末ぞ昔のゝうへ物をそ思ふ

松蘿の契と云ふ也更堪のうへ也

○むすめをもうけたる人　河大和物語津の国こもりうた
のうへをひきて略之

花　万葉廿十六曰昔有有娘子曰櫻児也于時二壮夫
挑此娘而指生格競貪死相敵於是娘子歔欷曰
從古来于今未聞未見一女之身往二門矣方今壮士
之意有難和平妾死相害永息尓乃尋入林中
懸樹経死其両壮不敢哀慟血泣連襟各陳悲
緒作歌二首　春されゝゝ　云々女と我こひ侘の
花ハちりなゝんを妹も名をもゝゝ　桜花さく
常ゝゝこひんやとゝのそよ　或曰昔有三男同
聘一女也娘子嘆息曰一女之身易滅如露三雄之
志難平進退途窮池上自投池也沉没水底於
時其壮士等不勝哀頽之至各陳歎心作歌三首
娘子字曰縵児有三首略之

てぐもをさゝめにかゝるつまこそあらめ
こゝのへにかすみへだてゝ　をちかたに
もわがこゝろをやるべくもあらぬ
かのまゝてゐていでうまつらぬ
ことをとて
せきもりのいとゞしくゆかぬ
ころかなあふさかやまをこえんとすれど
つゆやこぎをのまゝにれ
ゆきもやらずたえ
まもなくふるあまのかはとこそ
ながめわたらめ
ちはやぶるかみのいがきもこえぬべし
恋しきまにはなをたのまねば
ながるゝなみもしがらみぞかく
ながれてもたぐひあらじとおもふ
身をうきくさのねをたえてさそふ
水あらばいなむとばかりをみづくみ

○ゝとれ草つんてん 孟母の別れ子ゝもあつかい
よゝとわんゝ

○こめさ大ゝろ 細大やうをきゝゝさゝゝ

○あゝところ〳〵き 河 あそゝろ〳〵さ也
細 あつまのゝさゝて生長ゝ〳〵なれい心もをゝ
をゝゝゝ身をゝる〳〵きのゝ也

○わくゝゝと 河 反古

○ゝゝゝこいの 河 燈臺

○ゝのゝゝゝゝ 或抄 糸ゝゝゝゝ

○哀ゝゝは中ゝ 或抄 白宮ゝ浮舟ゝの雨中ゝゝ

○あそゝゝさは紙つゝひ 花 色ゝのゝとやゝをつゝ
ゝゝゝ

よをつゝゝとれなつゝてん。
わゝゝゝてゝこゝゝひ。今ゝ
ゝゝゝ泊ゝてきゝすゝゝんゝゝゝ
物ゝりひゝゝゝでゝりひゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝでゝゝゝゝ母のゝゝ泊ゝも
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ゐるようむつゝく　細　浮舟羽也
或板　思ひさま文をのこゝろをくゝはむつゝきさま

○心かゝるさま　或板　浮舟の心入水せんと思ふ
かゝるさまり

○あやをきて　河　親よさきもろ〳〵不孝の一也いかゝ

ふるまひをせんとおもふ

○ろろうろまり　細　三月の廿日也

○うの家あゝ　細　まへよ白宮ゝゝ又ゐるとき
用意しあへる乳母の夫が家のこと

○さてあろまりさ　細　浮舟心也
或板　白宮のむこよ出あんうあいちるうも
ろまりさるを見

いそうろうまい 或秋 ものみ人のさし出たる

うきのろうそくもいでてくるまいらせてまつらんとそうじのかくごしてくるものかな

○あら君 巴秋 吾君也 右近う羽

○うらうらも 或秋 西方をうらうらもひおいをよる白宮一方よりさきあけてさそうよりあかせつつはべりと

○ちいさきは羽ひとろは 細 右近心よ浮舟ハ白宮のかう人心ののこゝろそうくいつゝ

○くのこゝろよそ 細 浮舟の羽

○ろうるく 或秋 白宮の無別ろうかくしものいいやうろうるろ五ゐろんとろと

よ右をばうくばかりもきこえもたゞうらうらぐばかりいらるゝきはかりのはてもなくおぼしつゞけてこのこゝろうもをきものうつゞきてありのみぐばそわるあおうまぐさこゝろみ羽りひとろよろうおくのこゝろのろよのまくばうかりてとゝめんろめんとそおぼしつゞけてありつよつまそ羽のいてんうもかりうそうろうもやし

○うゐかうふるを　盃なり返すを云なさけの心也
おりくしもうゐかうふるもよくうつろふ白菊の心也

○ちとせともいはゝ或秋芒ハりもくれいこくもと
そあるべしとねがふこゝろ

○ゆくさきもとゝ河ろこゝいひひるさきもとゝ
あるしらいやさきとゝゆくさき

よろづよもとゝ此ふたつの花しもとゝ云羽伊勢物語にあり
ちとせともとゝいふこゝ
○右近ゝもとさの盃右近ゝ従者也
○いとまろうく　或抜右近ゝ心こ
○さゝのこゝろいはゝらく　花　不用
細　こゝろいハ中くうつろふこと　右近羽

○あさくさの細ねこのさこ

○いさこゝを　花　さらくこゝろこ用心もろ心也

○承とりとんの花しもとゝ云羽伊勢物語にあり
ちとせともとゝいふこゝ
○右近ゝもとさの盃右近ゝ従者也
○いとまろうく　或抜右近ゝ心こ
○さゝのこゝろいはゝらく　花　不用
細　こゝろいハ中くうつろふこと　右近羽

よろづよもとゝ此ふたつの花しもとゝ云羽伊勢物語にあり
のいこゝおかしてあり
まゝおかしのこゝをとゝろよ
さいおかしのこゝをいまこゝ
ろをとゝんでさゝのまひ
よもぎのもとゝさゝのまひ
さゝのいてゝあるおとこ女を
ぜひこのあをそでわかいこ
とこゝろいこゝおかしの
ゝこゝろいはゝらく　花　不用
細　こゝろいハ中くうつろふこと　右近羽

○うとうと　或抄　白宮の心也不審之

○うとくしさ人　細　時方也

○いろろこう　細　侍従う羽也

○おもへること　盃浮舟のうをいふ

○うろうの　或抄　白宮のうろ心さ〻ぬさま
つきて浮舟の物ごと

じをかきまぜいふやうに文
をでまくりてとろらんと
ぬぼとよりみてまぎ河ぶ
りうて仕給よりてざうざ
さ海よたどりとて仕うす
どくしきくそいろひま
ごとぐひうひうなるみ
おんおのおのおうしと
おうそてのみおうのもの
のさうぐうちうそ
いうりおさうぬまも如
とのとうぐおうぐうろ

○へきしさ　或抄　番の者ともへ氣ふ付てへと

○やうそさと心つひ　弄　白宮の系へひうへ給ん
定おはさんその夜といふ

○あれくのいさとさ　弄　さゝさ也

○うひ人　細　時方也

のまのうぐひすをぬ
みぐうそうそうこうぐ
くるんへそてまうさうぐ
ひいんぐでもんたうあのく
まいてあうりるんやぐてさも品
こうこうぐうのせをありひはべ
うん表ふてうもへこれどこひ
うまうくるんまてまぐうる
めのものいぐこまこなども
くるたうてまうまうんうの
ぬぐうもうぐおうぐうろ
のうくまうすこまん

○さとびさうらふ　細　侍従をさうひうら也

○さとひさうらふ　河　守家一夫迎ひ吹放野群牛引犢休　花　里ひろハ里るれさう心也又さとしくさ心をとる也　夫　敢拂　定家卿哥　さとひさう夫のこゝろそわれきり行よりおもふ人ハ

○とゝく〳〵　敢拂　時方う侍従といそうら也

○ゆふへさきよりかうして　玉　枝　夕をうしろより前へ肩をこさせうら也狭衣うとある羽也出雲守う墻をこさせうらと云義ありいう〳〵

○まいりてうらん　盃　白宮の道まいりもとよ集也

○あつうといふものを　河　枕本むりをさとあり

河　行騰　ムカハキ　泥障　アフリ

花　大和物語云　草の中よりあつうをうさせてをいさてなをりうか者云うまさきの大将山のうか水

よろづさてむろくさをときて萬の上よろづ
よあひよろづあり 今案わきりむろくさ兩本相違
ありといへども物語の證極分明うれいあるをそ可用也 下略
うろ道よ 細 好色の道よ也

○心ろくさ〳〵ハ 或抜 侍従也

○わさあり〳〵 細 いろろ惡敵鬼神ろうともと
わさをありうと云本あり是可然を心ハ鬼神ハさて
我身よとうてわさをろさんの心ろさも有〳〵し我よ
惡敵の心あろうへそ鬼神の形あうともと
或抜 惡と鬼よつろうろてろくへろ白宮のて
今の財をハろをそもりさと

○さて一ととも 細 白宮の詞

白宮心
けろろもあやきこわろさ
うみうろうろまろこふら
もろびくいえあるものさ
あろとやりつろうおろさ
ろとぐりおーろあろさ
人いまていとぐろあると
ろんてまろいぐきあろこと
おろ作ろたともろろ
よろとつぐきろ人のはあり
さ向ろうろひろく
ぐてもうきこさまま
ーろいまろ

○あり〳〵ろくろ〳〵 或抜 ろうろさてろひす
ろをを侍従ろかろ也

○ろてハろまりさ 或抜 人のろひろさみやろよ
ひてとも 侍従ろ羽也 一本ろまりさ 或本さへ
さまろよ

○身ををてても 細 侍従ろ我方を捨てのと

○くくとひさを　或拂　犬を追避也

○火おやうし　花　誰何火行とさしてひやうし
とり也夜行をとこ也

○いつてまう哥　白宮也　万水　ひの切るる打拂
ふとるさまるさんとおもふ人いつくともひさをあ
とこひよ忘しろう也

いつでまう哥

いづくまで身をやどすらん
ちるもしのこらぬものおかく
ざりさらばやそこの人を
うつし植ておきる海うく
長よおもふこころあよーあう
ふらひろうでまで

○右近ハひさり　弄　侍從ノ宮の御さまむひさろ称
そ右近う白宮のおろしろを入すんするひう
ふとひこうしろと浜荻よろうおよ又
侍從う帰てありまろ也

○あやしうんまろん　細　終夜泪よあしろまことを
ふろしろ也
○むこよ　河　無期
○ひうちを　花　を帯也
弄　浜荻也ろを可然乞を幸ろへし

○うの心のとうろく 細 芳のうを安くよ兵衛也

○うさぎ兵衛 細 うさぎ後よ安くさうめんうのうちありしとと

○心あうく 細 死後の名ぶろ〳〵とと

○うまき兵衛 浮舟也 細 名の残んる九日ありしとと

○こゝろの 盃 常ハ〳〵〳〵さ兄弟しのうろと
或抜 常陸うまとも九うも也

○九やろくと 盃 中君をハ兄弟の内よ一さ八兵と

○あをそ八河 万葉あをそのありそへるさ
うしろハかうのりこそ引れ
○ひつーのわいた 河 歩ニ近死地人余亦如是 変
屠不羊歩事也唐土ハ羊牛を飼置て食時
ハのろ〳〵て屠所へ相具〳〵ゆき殺をこ歩ニよこ
しひて死地ニ近つく是と無常ニ喩也
花きつも又むきの貝てをなさるれひつ〳〵ゆあを
ちつさめくん
○八やハいろ〳〵さ〳〵 細 句宮ニうの文也

○うとて不哥 浮舟句宮ハ返ヲの哥也 河うの蛭ハ
くとたろくもるくまつねの草ハ山 烟〳〵ニよそ
後撰中将更衣ニ受てたるまりのをゆめてそを
いつくをそうとてそうとハまり
細 入水の心あり
○うのとめ〳〵 血 芝ニ也

○ゑくよ 巴歌 句宮と芸とこそれをやまれハて
ゆくせのていくと是非をいかゝてくの用捨歟也

○おもひうの夢よ 孟 これうゝ母の文ハ引

○人のいしとらみて　河　解夢書曰　夢見病人必死
孟　葬礼に夢よろこぶ也
○ねんごろにおもひかはして　弄　ねんごろにてやうて文をかく　意之
或抄　ねんごろにて也
○ところどころうちうちにて人　孟　業也廿三宮よりの品
念もわろくしたる
○女房のもと　或抄　女房妻産前よりつねとも庁
時も立されハ常陸のいつくしまの
○そのちかき寺　或抄　あたりの寺也そのさきざきの
とハ所をやうの布施也

○ゆくさうと云　細　浮舟の心也
或抄　浮舟の命ハてうと母のもとて祈禱の
ものをとの事をゆくさうと云
○のちよ又哥　浮舟也　細　今生てハあひ来生と
期もろと也ありてハさハりあるへき哥也
○ゆくへもしらぬ身　弄　此句其心を哀うたへしらく
とつくし

○うるのこころ寄 浮舟也 或抄心明也あくれるう是也 此古ひる多 蜻蛉巻よあり是も母のくに也

○巻数りてこころみ 弄 誦経してする巻なよう さぬくるやうく

○物の枝よ 或抄 巻数付る枝するくし

○心くらとの 河人よめるつさのるさよりひさ てむねくるく大よ心やをそう町 心くるくし胸 そくろ同る也 細 りるさいさのそう也

○くるくしさく抄 細 浮舟の心迷入水の心ゆれ八也

○物さこうめさめ 孟 乳母の行也

○さこうろめれし 細 乳母の衣ぬさこくあつひさ こいれと我ゐるくるりなハいくちんそんと老 しろをうて長一ろ行也

○ものをとのこゆうひごるる るをとうくて我也つこうてこそ てろよ此ろ抄のてをころみうさ つをてごころいえろくるまでし いつぐ抄のえそよのつまて亜 つかのてわやくころごるのすあ るるみもころごとの活也 つごのみべくさぶごといるまう とるるこさうて抄さ こうめれハ也 物さこうめさめ 孟 乳母の行也

○さこうろめれし 細 乳母の衣ぬさこくあつひさ こいれと我ゐるくるりなハいくちんそんと老 しろをうて長一ろ行也

○世中ろえあり 四抄 母のくに也 或抄 乳母ろかのめさそやとろへも泪ろもひて いくれそく

○うくのえりのと 或抄 右近ろ行也

○いめしさハくし 四抄 母のいめえめさといひを うせてるる也

○いろさし 孟 白宮そも堂そ七一方よひ さきめ多くと右近ト也

いづくよりあんとおりひやりおも。
いくあそれやう。世中よえるそろ
まもきこ由を。河のあってていくん
るどおりとろのまづぬごろされ
て。さるごいるごをつこおて。
ものもいそれど。宮辺なごらく
よそて。くのこのをおりの也び。
抄ゆりえのありあくろやる
りのるれいるみものらごるん
う。いづくこおごさるてい
もくろまさんとやものく。
るろをうをてあて。

○ゆゑ語ろくろん 孟 ろくん と八常のごく也是八
ろをろよろさつきんもよくくるんとろさぐめくり